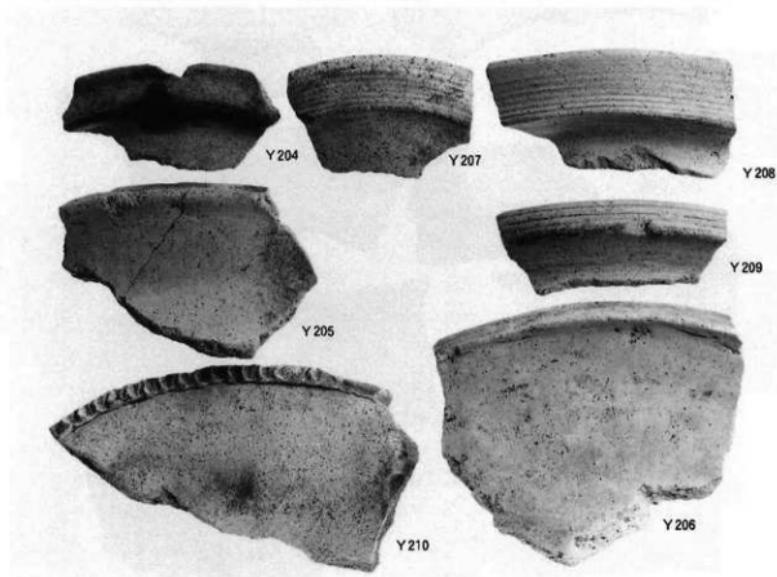
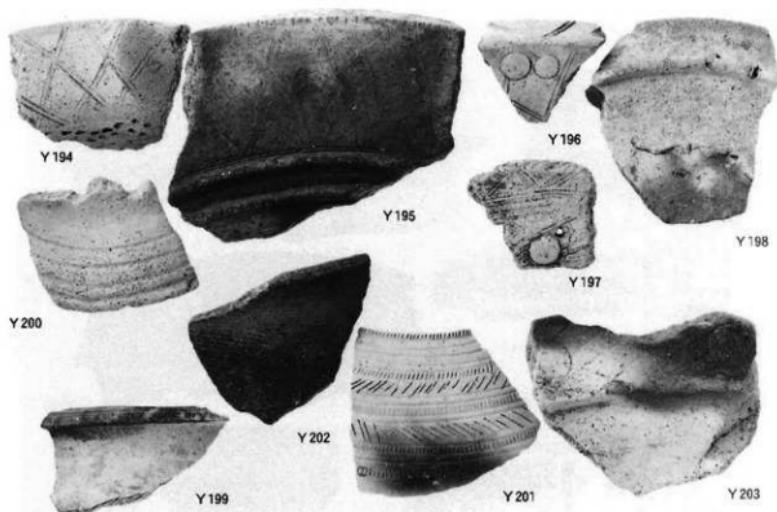
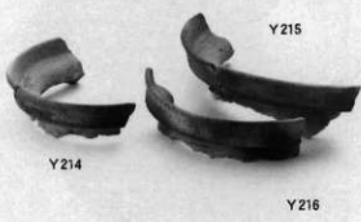
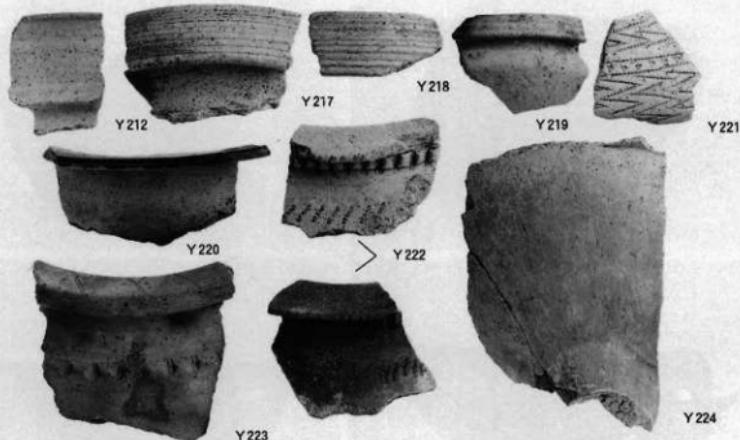


写真図版七八
包含層出土弥生土器



写真図版七九 包含層出土弥生土器



写真図版八〇

包含層出土
弥生土器



Y225



Y229



Y226



Y230



Y227



Y231



Y228



Y232

写真図版八一 包含層出土弥生土器



Y 233



Y 237



Y 234



Y 238



Y 235



Y 239



Y 236



写真図版八一
包含層出土弥生土器



Y240



Y244



Y241



Y245



Y242



Y246



Y243



Y247

写真図版八三 包含層出土弥生土器



Y248



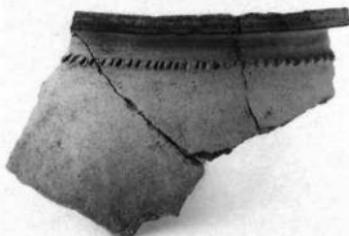
Y252



Y249



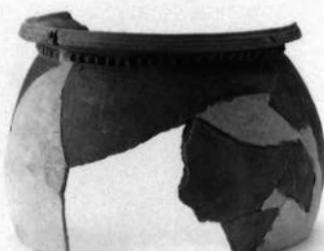
Y253



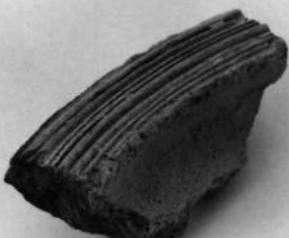
Y250



Y254



Y251



Y255

写真図版八四
包含層出土弥生土器



Y256



Y260



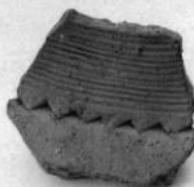
Y257



Y261



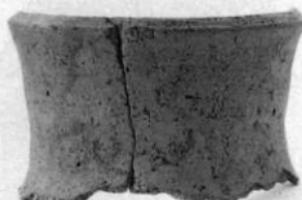
Y258



Y262



Y259



Y263

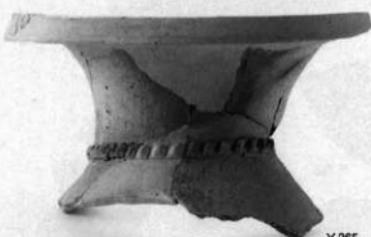
写真図版八五
包含層出土弥生土器



Y264



Y280



Y265



Y281



Y266



Y286



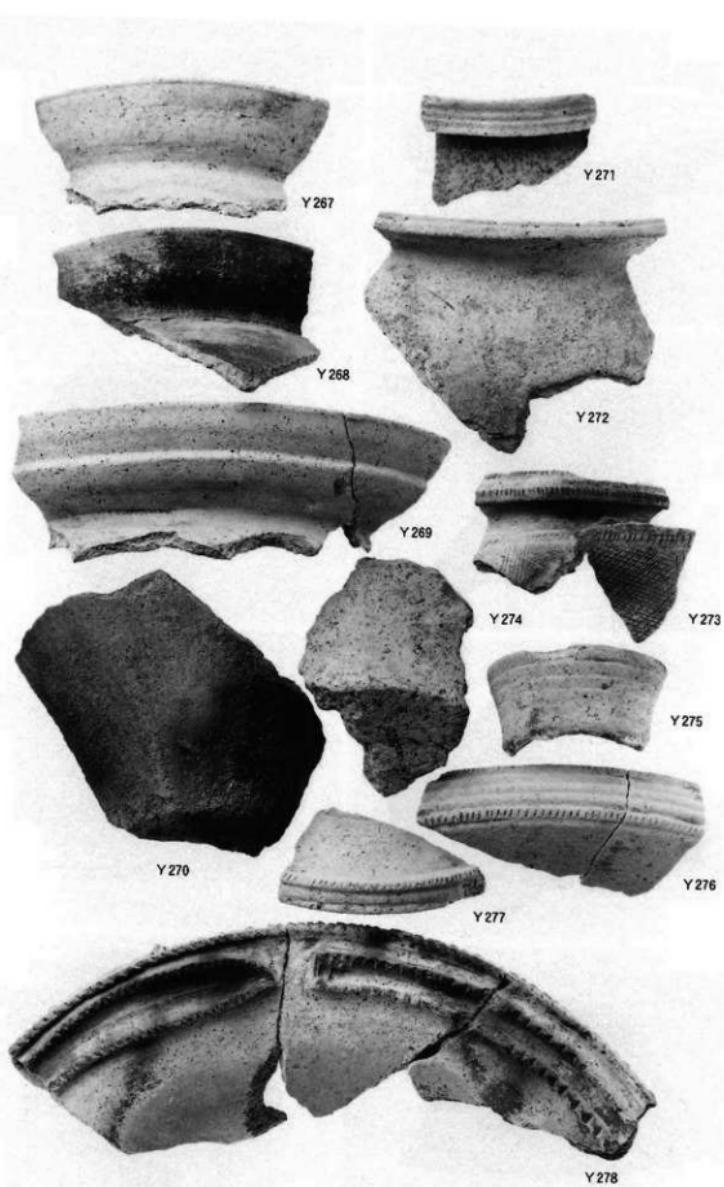
Y279



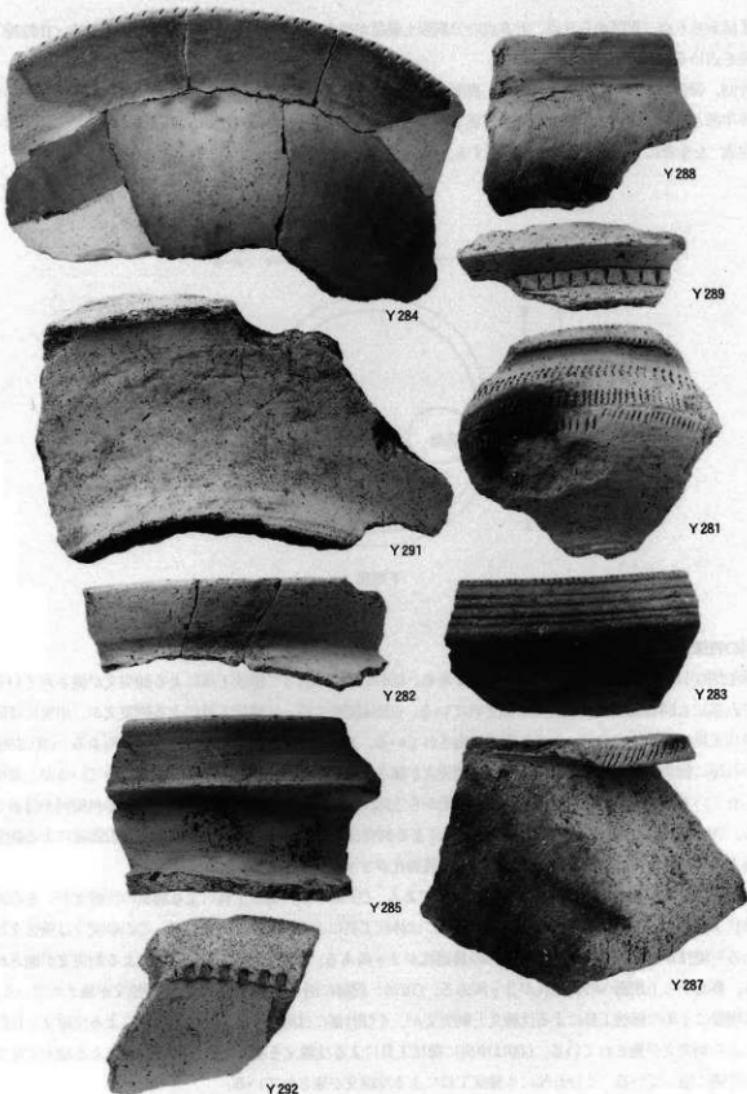
Y290

写真図版八六

包含層出土弥生土器



写真図版八七 包含層出土弥生土器

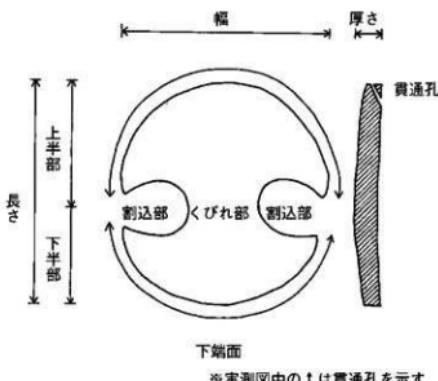


第2節 土製品

1. 分銅形土製品

I区から6点、IV区から3点、計9点の分銅形土製品が出土している。いずれも形状は山陽地方・山陰地方で主流を占める円形のものである。

今回、報告にあたっては慣例に従い、裏面から側面にかけての貫通孔のあるものを上半部、貫通孔のないものを下半部とした。また、主に文様のある面を表面とする。部分名称については川越哲志氏の定義¹⁰、森田孝一氏の定義¹¹を参考にし、下図のように呼称する。



*実測図中の†は貫通孔を示す

個別の特徴

第92図C01は下半部、C02~C04は上半部である。C01は周縁に沿って棒状工具による刺突文が施されている。くびれ部にも同じ施文具で刺突文が施されている。C02は周縁に沿って棒状工具による刺突文が、中央には同じく棒状工具による刺突文がいわゆる眉状に施されている。裏面から上端面への貫通孔が4ヶ所ある。C03は周縁、くびれ部に刺突文が、同じく中央に眉状の刺突文が施されている。上端面にも刺突文が施されているが、表面に使われている施文原体とは異なっている。裏面から上端面への貫通孔が7ヶ所ある。一部に赤色顔料が付着している。C04は表面・裏面ともに周縁に日暁腹縁による刺突文が施されている。上端面にも日暉腹縁による刺突文が施されており、刺込部に側面から上端面への貫通孔が2ヶ所ある。表裏面に黒斑がある。

第93図C05~C06は上半部、C07~C09は下半部である。C05は中央に棒状工具による眉状の沈線文が、その両側に棒状工具による刺突文が施されている。上縁には棒状工具による刺突文がめぐらしく、この刺突文は重弧文状にまわる可能性がある。裏面から上端面への貫通孔が2ヶ所ある。C06は周縁に日暉腹縁による刺突文が施されている。裏面から上端面への貫通孔が3ヶ所ある。C07は、周縁に沿って棒状工具による押捺文が施されている。C08は周縁に4条の棒状工具による沈線文と刺突文が、くびれ部には同じく4条の棒状工具による沈線文と貝殻腹縁による刺突文が施されている。C09は中央に棒状工具による沈線文を施した後、貝殻腹縁による刺突文を沈線文の片側に施している。くびれ部にも棒状工具による沈線文が施されている。

時期と評価

青木遺跡出土の分銅形土製品は遺物包含層で出土しており、明確にその所蔵時期が確定できるものはない。そ

ここで、これらの文様に着目すると、おおきくみて十製品の中央に文様を施すもの(C02、C03、C05、C09)と、周縁に沿うように文様を施すもの(C01、C04、C06～C08)の2つがみられる。これらは時期差によるものとされ、分銅形土製品の分布中心域である岡山県では前者が弥生時代中期中葉、後者が弥生時代中期後葉以降とされる¹⁰。青木遺跡に限らず、山陰地方で出土しているものについては、そのほとんどが遺物包含層出土のもので、時期が限定されるものはほとんどない。後者は鳥取県米子市青木遺跡出土例¹¹や、米子市新山山田遺跡出土例¹²などから岡山県の編年と同じ流れが追認できており、前者の年代もほぼ時期的傾向を有するにすると考えられる。よって、中央に文様を施すもの(C02、C03、C05、C09)については中期中葉に近い時期、周縁に沿うように文様を施すもの(C01、C04、C06～C08)のものについては弥生時代中期後葉以降のものだと考えられる。

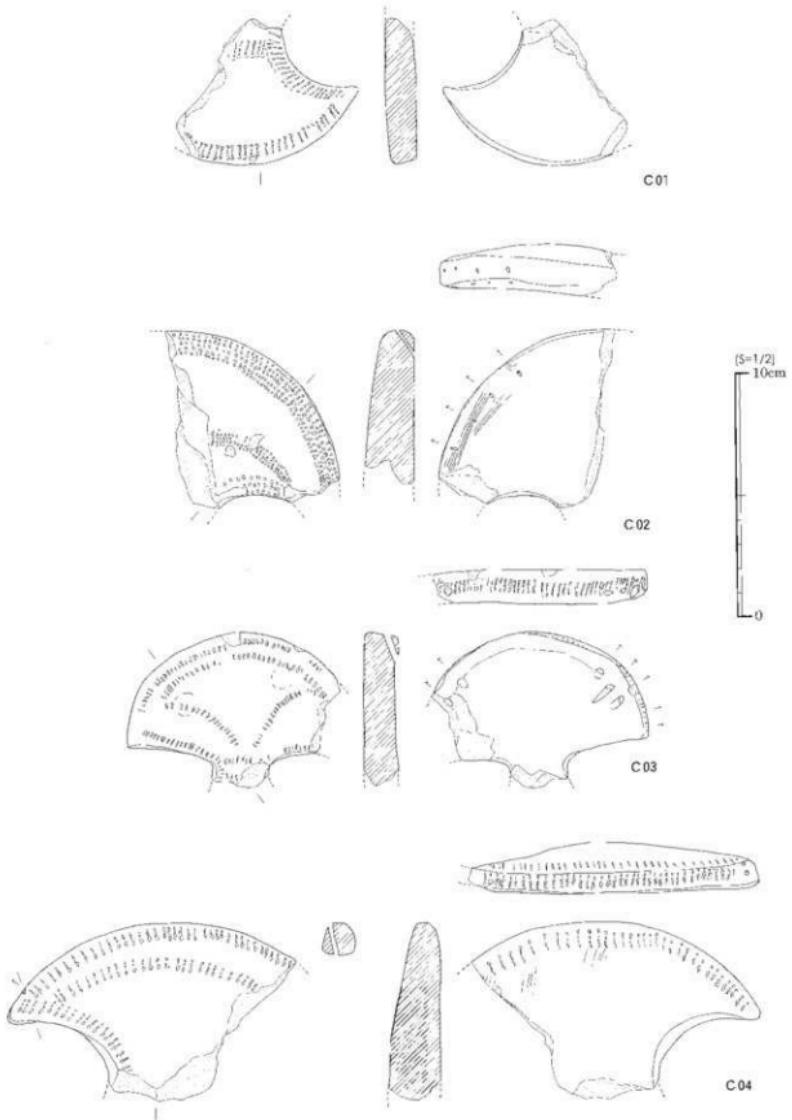
出雲地域の分銅形土製品出土遺跡の傾向をみると、定量以上出土した遺跡としては松江市布田遺跡(10点)、西川津・タチチョウ遺跡(10点)、古志本郷・下吉志遺跡(10点)の出土があり、平野部に展開する拠点的集落で多く使用されていることがうかがえる。調査対象となった面積の多寡に比例することは事実であるが、矢野遺跡・白枝本郷遺跡・石台遺跡など出雲地域で中心的な集落と日される遺跡では1点以上の出土が確認されており、集落遺跡では分銅形土製品の存在が不可欠といえるほどの傾向にある。青木遺跡では9点が出土しており、広大な範囲が調査された古志遺跡群や西川津遺跡群と比較するとその密度はかなり高く、分銅形土製品を用いた祭祀が継続的に、大規模に行われていたことが推察される。一般に分銅形土製品を用いる行為は墳墓を含めた埋葬・祖靈祭祀ではなく、生産にかかる集落内祭祀と考えられている。青木遺跡は中期後葉～後期後葉にかけて墳墓以外の遺構が確認されていないため、周辺に居住域が展開していて、そこから二次的に移動したと想定するのが妥当であろう。本例のように墓域からまとまって出土している状況は特異であり、そうした想定の当否を含めて注目される。

【註】

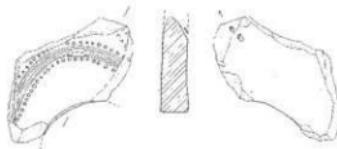
- (1) 川越哲志1983「安芸・備後の分銅形土製品」河瀬正利・藤野次火編『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、49頁
- (2) 森田孝一2000「分銅形土製品」山口県編「山口県史 資料編 考古Ⅱ」山口県、901頁
- (3) 東一潮1971「分銅形土製品の研究(1)」「古代古備」第7号、古代古備研究会、11～25頁
- (4) 青木遺跡発掘調査班編1976「青木遺跡発掘調査報告書」青木遺跡発掘調査会、120頁、挿図284
- (5) 杉谷愛恵他編1994「笠原・奥陰田」米子市教育文化事業団文化財報告書7、財團法人米子市教育文化事業団、267頁挿図198-1、挿図198-2、
- (6) 深田洋史編1996「新山山田遺跡(6)(X)」財團法人米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書19、財團法人米子市教育文化事業団、23頁、P629

第29表 分銅形土製品 観察表

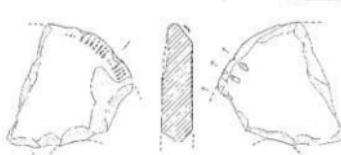
番号	残存 部位	調査 箇所	グリッド	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率	調整	文様	色調	穿孔	備考	
C01	下半部	N	D19	5c	(6.0)	(7.5)	1.3	50.4	30%	全面：ナデ	表面：周縁に沿って櫛状工具による刺突文	表面・側面：灰褐色/裏面：褐色			
C02	上半部	I			(7.3)	(7.2)	(2.0)	100.2	25%	表面・側面：ナデ/裏面：ハケメ、ナデ	表面：周縁に沿って櫛状工具による刺突文 中央に唇状に櫛状工具による刺突文	表面：灰褐色2/裏面：灰褐色4	裏面から上部黒褐色にかけて貫通孔4ヶ所	表面一部黒褐色赤色頗料付着	
C03	上半部	I	北 空 窓 溝		(6.4)	(8.7)	(1.4)	84.6	40%	表面裏面：ナデ/裏面：指揮印/表面：ナデ	表面：周縁に沿って櫛状工具による刺突文 中央に唇状に櫛状工具による刺突文 「彌文」 表面とは異なる唇状工具による刺突文	裏面から上部黒褐色にかけて貫通孔7ヶ所	裏面から上部赤色頗料付着		
C04	上半部	N	北 空 窓 溝	16	(7.3)	(11.7)	2.1	119.6	40%	表面・側面：ナデ/裏面：ナデ、ハケメ	表面：周縁に沿って貝殻腹縁による刺突文 上部面：ナデ/裏面：ナデ、ハケメ	表面：灰白色1/裏面：灰褐色1	側達部から上端面にかけて貫通孔2ヶ所	深黒斑	
C05	下半部	I			9	(5.1)	(5.2)	1.3	25.3	20%	全面：ナデ	表面：中央に輪柱沈線文及び唇状工具による刺突文 周縁に櫛状工具による刺突文	全面：灰褐色	裏面から上部黒褐色にかけて貫通孔2ヶ所あり	
C06	上半部	N	D20	6	(5.0)	(5.2)	1.3	32.9	20%	全面：ナデ	表面：周縁に沿って貝殻腹縁による刺突文	表面・裏面：桃褐色	裏面から上部黒褐色にかけて貫通孔2ヶ所あり	裏面黒斑	
C07	下半部	I	SK17		(4.1)	(4.7)	0.9	24.2	25%	全面：ナデ	表面：周縁に沿って棒状工具による押捺文	表面：灰褐色2/裏面：桃褐色3			
C08	下半部	I	E14	YI	(6.1)	(5.1)	1.4	41.7	25%	表面裏面：ハケメのちナデ 指揮印 指揮さえ	表面：周縁にそつて櫛状工具による刺突文及び唇状工具による沈線文及び唇状工具による沈線文及び貝殻腹縁による刺突文	表面：灰褐色1			
C09	下半部	I	D14	10	(5.6)	(9.0)	1.4	54.1	30%	全面：ナデ	表面：中央に輪柱沈線文及び唇状工具による刺突文 口びれ部に唇状工具による沈線文	全面：灰褐色2	裏面黒斑		



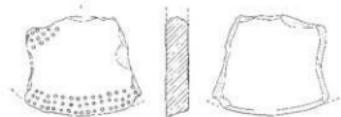
第92図 分銅形土製品実測図①



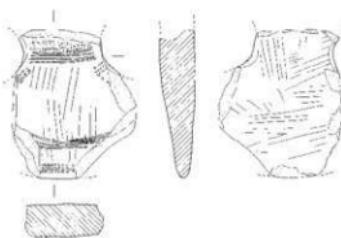
C05



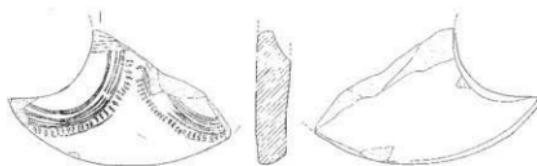
C06



C07



C08



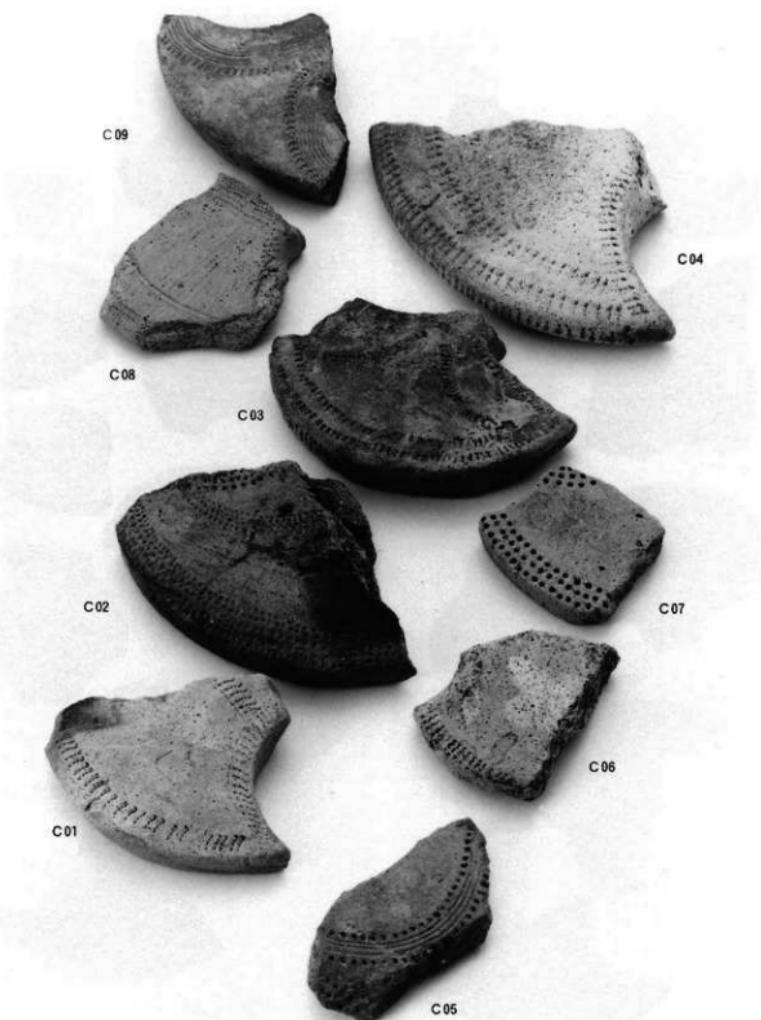
C09

(S=1/2)
10cm
0

第93図 分銅形土製品 実測図②

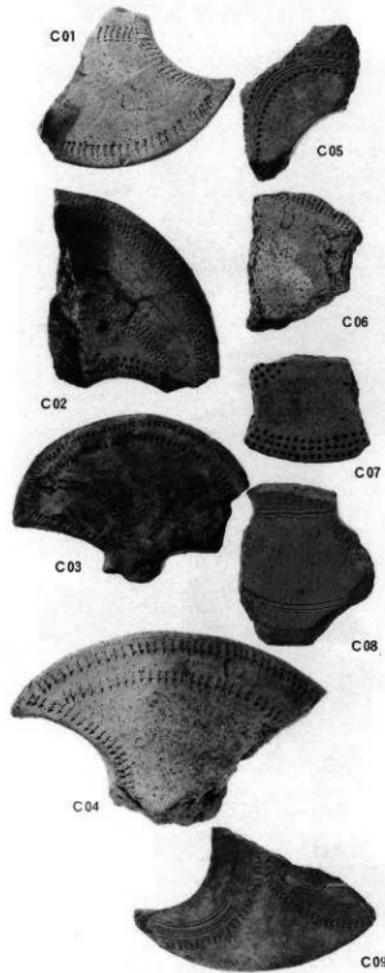
写真図版八八

土製品／分銅形土製品



写真図版八九

土製品／分銅形土製品



表面

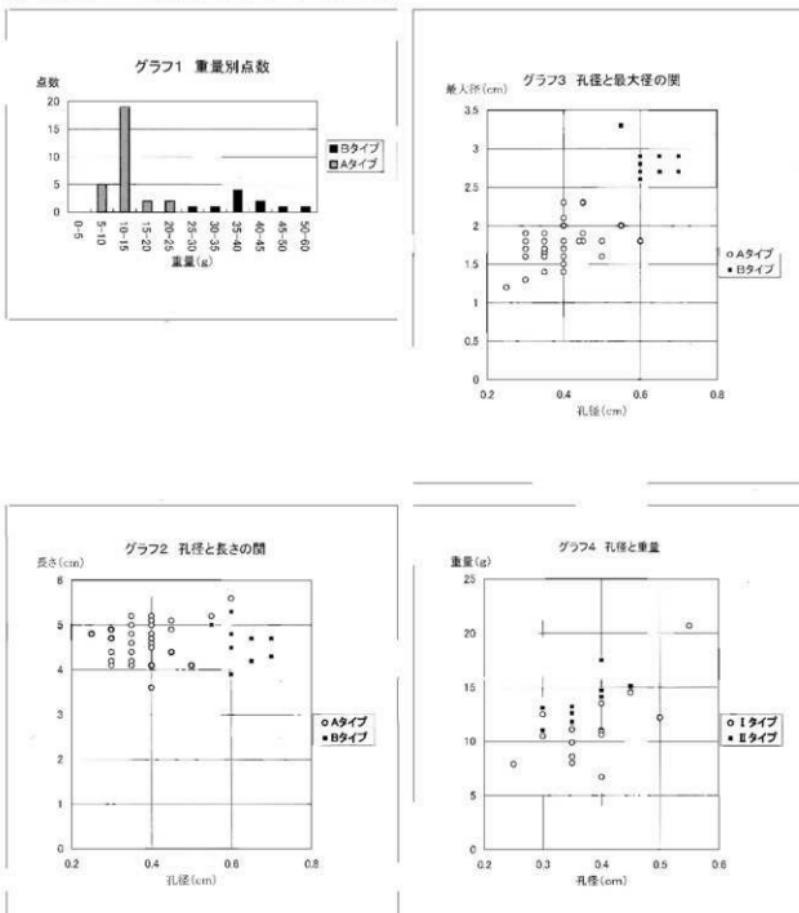


裏面

2. 管状土錘・土玉・紡錘車・有孔円盤

管状土錘 (C10~C66)

中軸に孔が貫通する、いわゆる管状土錘57点が出土している。出土地点はI区に集中しており、ただ唯一C36がIV区から出土した他は、すべてI区からの出土である。なかでもED15・16グリッドの20m四方には高い集中がみとめられ、その周囲にかけて密度が低くなる。出土層位は不明なものが多いが、I区10層に含まれていたものが目立つ。幅があるが弥生時代後期～古墳時代中期のうちの、ある短期間に使用された一群と評価できる。出土地点が集中していることからみると、かなり一括性が高いことも想定しうる。極論すれば、1～2セットの漁網に使用されていた可能性がある、ということである。



形態・法量から大きく2大別することができる。仮にAタイプとBタイプと呼ぶ。Aタイプは第94図に掲載した。細長い形状で最大径1.2~2.3cm、長さ4.0~5.2cmのもの。C10~C54の計45点が該当する。Bタイプは第95図に掲載したものでC55~C65が該当する(C66はどちらにも属さないので、分析から除外している)。長さに対して径がよく、最大径2.5~3.3cmのもの。

AタイプとBタイプの差異は形態からも明瞭であり、管状土錘に関する専論においてもこうした形態差に重点を置く分類が重視されている¹⁰。本遺跡の場合は前記のとおり、ある程度の一括性がある可能性が高いため、A B両タイプの差異にはそれぞれ対応する別の漁網が想定される。沈子としての機能面で、AB両タイプの最大の差は重量である。欠けなく完形で出土したものの重量分布はグラフ1に示したとおりで、両者の重量は重なりなく明確な違いを示す。重量の違いは網の規模や操業水域の環境、対象とする魚種の違いに応じた意図的な作り分けである。内田伸雄氏は現代の刺網に使用される管状土錘の製作工程から、土錘製作には形態より重量が重視されていることを指摘している¹¹。

次に、管状土錘の傾性として重視されるのが穿孔された孔の径である。管状土錘は漁網の下端に渡した沈子網に通して固定されるものであり、孔の径が沈子網の径を規定するからである¹²。孔径と土錘全体の法量の対応関係をグラフ2とグラフ3に示した。まずグラフ2で孔径と長さの完形を見ると、Bタイプが全体に孔径が大きいことが見て取れる。Bタイプが0.6cm前後であるのに対し、Aタイプは0.3~0.4cmに集中する。孔径はこのように明確な差があるが、長さについては横並びで両タイプともほとんど違はない。一方、グラフ3で示したように孔径と最大径の関係をみると、右肩上がりの比例関係にあることがみてとれる。

以上のことから、青木遺跡出土の上錘に認められる2つのタイプ差は重量の違いであり、しかも孔径の違いが重量差に対応していることが見て取れた。また、Bタイプのものは重量を得るためにには上錘を長くするのではなく、太く作っている。用途については断定できないが、Aタイプとした細長いものは穴道湖など内水海での刺網に使用されたことが想定できる。孔径3mm~4mm、重量10~15gに集中しており、規格性が高い。一方のBタイプはより漁網下端の固定が必要となる袋網や外海での刺網などで使用された可能性がある。

次にAタイプとした群の中にみられる形態差について検討する。第94図に実測図を示しているが、この群の中にも若干の形態差が認められる。仮にI・II・IIIと3タイプに分類すると、Iは端部と中央部の径があり変わらないもの、IIは中央部が穂をもって明瞭に太いもの、IIIははだらかに中央部が太いものである。IIにはC34、C45~C53が、IIIにはC35とC36が、Iにはそれ以外のものが該当する。

IIIは明らかに重量が大きく、他のものとは別の網に使用されたものの可能性があるが、IとIIは出土地点や長さ、最大幅などの法量が共通し、形態の違いが何に起因するのか明確でない。違いが認められるのは孔径と重量の関係においてである。グラフ4に示したように、同一の孔径でもIIの方が相対的に重量が大きいことがみてとれる。前述のように管状土錘の重量は漁法を決定づける重要な要素であり、製作には慎重かつ明確な意図が反映される。このような違いを考慮すれば、I・II・IIIの小タイプ差は別の網に使用されたことを示すとも解釈できる。

端部の調整を観察すると、IIのタイプ(中央が膨張する)には半坦に整えた切削面があるものが多い。端部を丁寧に整える調整は、装着した沈子網が土錘との摩擦によって切削されてしまうことを避ける意図で加えられるものである。Iタイプのものは全体に端部を丸めてナデているのに対し、IIタイプはシャープかつ半坦に切削しているものが多い。また、Iの表面は摩耗しているものが多く、孔の端部に紐ずれがあるなど明確な使用痕跡が認められるのに対し、IIの表面はナデ調整の条線や指紋まで残っているものがあり、端部の状態も良好に残存していて使用痕跡が希薄である。以上のことは、IとIIが別のグループとして別の網に使用されていたものであることを示すかもしれない。

胎土や焼成には個体差が大きい。A IIIタイプ(C35とC36)は胎土に砂粒を多く含み、ざらついた質感をしている。A Iタイプもやや胎土が粗い。その他のものは基本的に砂粒をあまり含まず、きめの細かい胎土が使われ

ている。A I タイプには焼成時の黒焼を残すものや、全体が黒色を呈するものがあり、全体に焼成が均質でなく不良な印象を受ける。

【註】

- (1) 和田晴吉1985「土錘・石錘」『弥生時代の研究』第5巻道具と技術、雄山閣
- (2) 内田律雄2004「内水向漁業における土製漁鉤錐」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集』
- (3) 真鍋篤行1993「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)』瀬戸内歴史民俗資料館

石錘 (C68)

石製の網縫が1点出土している。本来は石製品の節に掲載すべきものだが、土錘との関連でここに掲載している。ラグビーボール状の形状をしたもので、先端は尖る。鋭い工具で溝が十文字に彫られている。表面は部分的に擦痕を残すが丁寧に研磨して仕上げられている。

土玉 (C67)

管状土錘とは異なり球形をしたもので、祭祀等の用途を想定されるいわゆる土玉と考えられる。1点のみ川土している。

有孔円盤 (C69～C71)

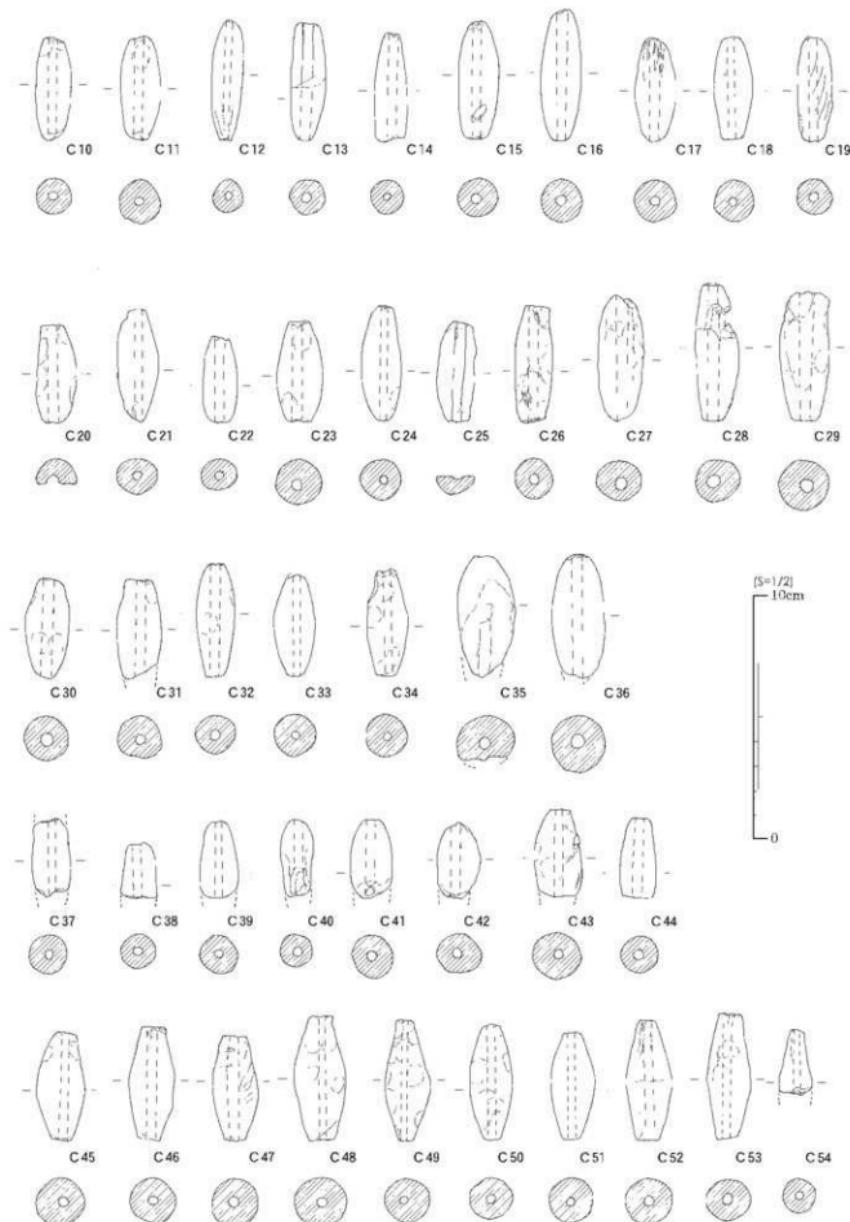
いずれも土器体部を破碎し穿孔したもので、3点が出土している。C69は整った正円形を呈し、中央から3mmほどずれた位置に穿孔されている。側面は破面を丁寧に磨いて整えている。内外面とも丁寧にナデ調整に観察され、胎土はきめ細かい。外面はナデ調整ではなく、本来あったハケメなどを磨いて消した可能性もある。時期は判断しがたいが、古墳時代以前であろう。C70はやや難に輪郭を打ち欠いたもので、外面にはハケメが残る。側面の破面は簡単に磨かれている。白っぽい胎土の色調から、弥生後期～古墳時代前期ごろの土器と推定される。C71は粗く輪郭を打ち欠いたもので、破面は磨かれていない。平面形はやや長椭円気味で、整ったものではない。内面に粗いケズリがあり、全体にうねりがあって平坦ではない。時期は特定できない。

紡錘車 (C72)

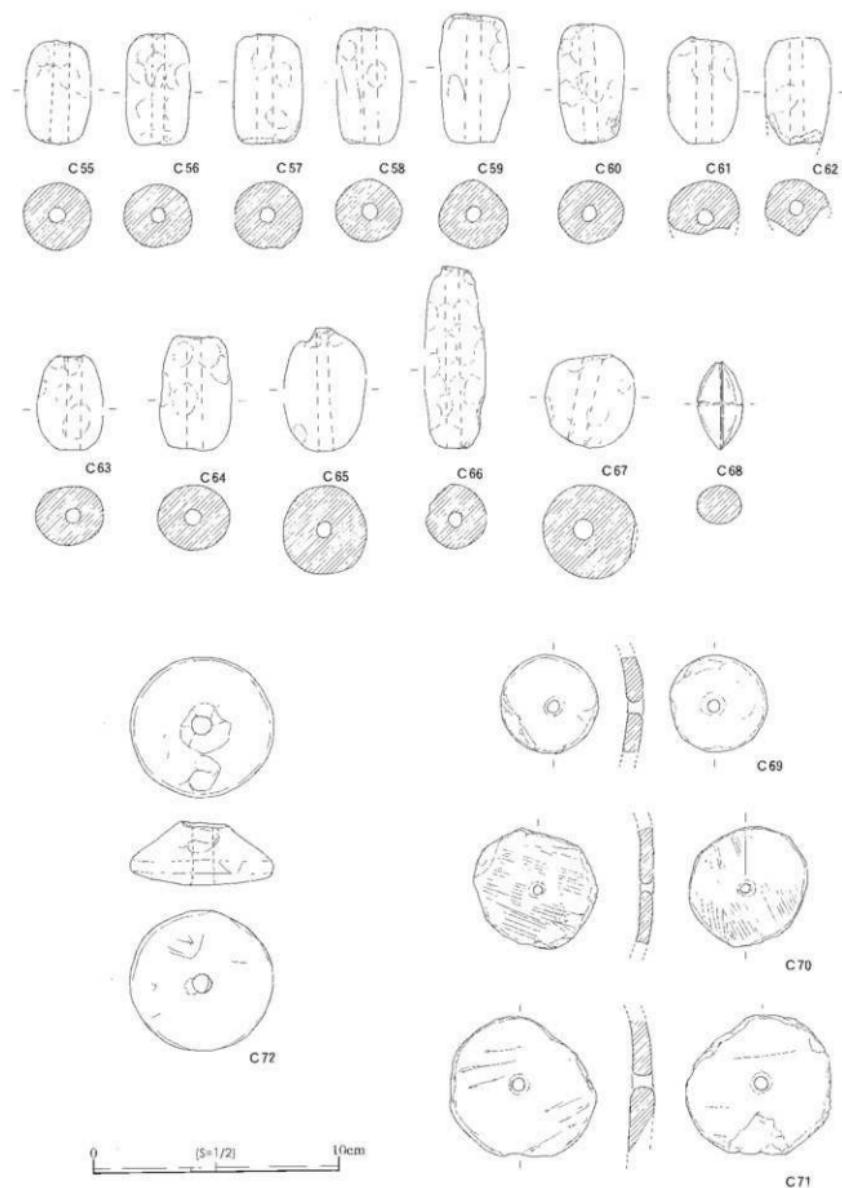
土製の紡錘車。このほか石製品の節に4点、石製紡錘車を掲載している。C72は表面を丁寧なナデで仕上げられており、輪郭や軸孔の位置も整っている。下面には細く深い線で内向きの鉢附文が彫られているが、ほとんど摩耗して観察することが難しい。

第30表 管状土錘・紡錘車・有孔円盤 觀察表

番号	地区	グリッド	層位	長さ (cm)	厚 大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存率	調 整	色 調	備 考
C10	I	F13		10	4.1	1.4	0.35	8.0	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3
C11	I	F16		10	4.1	1.65	0.35	11.1	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2
C12	I	F14		10	4.8	1.2	0.25	7.9	ぼば完形	全面：ナデ	全面：灰色1
C13	I	E15		12	4.7	1.4	0.4	6.8	全体の75%	全面：ナデ	全面：灰色1
C14	I	K16		10	(4.4)	1.3	0.3	8.3	全体の80%	全面：ナデ	全面：灰褐色2一部斑斑
C15	I	E16		10	4.8	1.6	0.4	11.0	完形	全面：ナデ	全面：灰色2
C16	I	F14		10	5.2	1.7	0.4	13.5	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色2
C17	I	D15	24	4.1	1.7	0.4	10.9	完形	全面：ナデ	全面：青灰色1	
C18	I	実試験区		4.1	1.6	0.3	10.5	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色3 岩縫切削	
C19	I	B16		4.2	1.4	0.35	8.6	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色2	
C20	I	B15		4.1	1.6	0.5	5.5	全体の50%	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 岩縫切削	
C21	I	K14	9	4.6	1.6	0.35	9.9	ぼば完形	全面：ナデ	全面：灰褐色2	
C22	I	K16		3.6	1.4	0.4	6.7	ぼば完形	全面：ナデ	全面：灰色2	
C23	I	実試験区		(4.2)	1.9	0.45	13.3	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 岩縫切削	
C24	I	S1溝		4.7	1.6	0.3	12.5	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C25	I	-		4.1	1.5	0.4	5.0	全体の50%	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 岩縫切削	
C26	I	E溝ベルト		4.8	1.6	0.35	11.1	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 岩縫切削	
C27	I	D15		5.1	1.8	0.45	14.5	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色3	
C28	I	排水土		5.6	1.8	0.6	12.3	全体の80%	全面：ナデ	全面：灰褐色3 下端切削	
C29	I	南底張区	34	5.2	2.0	0.55	20.7	ぼば完形	全面：ナデ	全面：灰褐色4 岩縫切削	
C30	I	SB17		4.1	1.8	0.5	12.2	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色4	
C31	I	B16		(4.1)	1.8	0.4	11.4	全体の80%	全面：ナデ	全面：灰褐色2 岩縫切削	
C32	I	E16		4.6	1.6	0.4	10.6	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 一帯黒斑 向端切削	
C33	I	SK06		(4.2)	1.7	0.3	10.9	ぼば完形	全面：ナデ	全面：灰褐色2 一帯黒斑	
C34	I	SB05		(4.4)	1.8	0.35	11.6	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 一帯黒斑 下端切削	
C35	I	D16	22	4.9	2.3	0.45	17.1	全体の75%	全面：ナデ	全面：灰褐色2 一帯黒斑	
C36	IV	Y20	5C	5.0	2.3	0.4	22.1	全体の90%	全面：ナデ	全面：灰褐色1	
C37	I	G15	10	(3.3)	1.5	0.3	8.3	全体の50%	全面：ナデ	全面：灰色1 部墨斑	
C38	I	D17		(2.3)	1.35	0.4	4.6	全体の50%	全面：ナデ	全面：黑色 助土瓦質	
C39	I	B15	9	(3.1)	1.5	0.35	7.0	全体の50%	全面：ナデ	全面：黑色 助土瓦質 破損後使用摩耗	
C40	I	S1溝		(3.2)	1.3	0.4	5.1	全体の60%	全面：ナデ	全面：灰色1	
C41	I	E15		(3.3)	1.6	0.4	9.4	全体の60%	全面：ナデ	全面：灰色2 破損後使用摩耗 系ずれ痕	
C42	I	B16		(3.1)	1.8	0.4	8.0	全体の70%	全面：ナデ	全面：灰褐色2 向端切削	
C43	I	西溝中		(3.6)	2.0	0.4	13.1	全体の70%	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 錫部切削	
C44	I	-		(3.3)	1.5	0.4	7.0	全体の70%	全面：ナデ	全面：灰褐色2 部墨斑	
C45	I	C溝		4.5	2.0	0.4	14.7	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2	
C46	I	G14	10	4.7	1.8	0.4	14.1	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色3 向端切削	
C47	I	F17	10	4.4	1.9	0.45	15.1	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色3 向端切削	
C48	I	E15	34	5.1	2.1	0.4	17.5	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 向端切削	
C49	I	E溝ベルト		4.9	1.8	0.3	11.0	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 向端切削	
C50	I	E溝ベルト		4.6	1.7	0.35	11.8	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 下端切削	
C51	I	東括弧区	34	4.4	1.9	0.3	13.1	完形	全面：ナデ	全面：灰褐色2 向端切削	
C52	I	B15		5.0	1.9	0.35	13.2	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色4 向端切削	
C53	I	B15		5.2	1.7	0.35	12.6	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 向端切削	
C54	I	S溝ベルト		(2.7)	1.9	0.35	3.9	全体の40%	全面：ナデ	全面：黑色 助土瓦質	
C55	I	H13	9	4.3	2.7	0.7	34.4	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C56	I	G17		4.5	2.8	0.6	35.5	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C57	I	F16	10	4.5	2.7	0.6	39.8	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C58	I	G14	10	4.7	2.7	0.65	37.9	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C59	I	F12		5.3	2.9	0.6	43.7	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2	
C60	I	F15	8	4.8	2.6	0.6	39.2	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C61	I	D15	34	4.2	2.9	0.65	30.2	全体の60%	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C62	I	-		(4.3)	2.6	0.6	27.3	全体の80%	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C63	I	S07		3.9	2.7	0.6	25.8	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色4 一部黒斑	
C64	I	S027		4.7	2.9	0.7	40.5	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C65	I	G15		5.0	3.3	0.55	38.5	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3 部黒斑	
C66	IV		5C	7.4	2.5	0.6	49.8	完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色3	
C67	I	G16	8	3.8	3.9	0.8	46.9	ぼば完形	全面：ナデ、指頭圧痕	全面：灰褐色2 土塗か	
C68	I	S004	基礎下	3.5	1.9	1.55	11.5	完形		石漠	
<hr/>											
番号	地区	グリッド	層位	長さ (cm)	厚 大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存率	調 整	色 調	備 考
C69	I	E14		12	4.0	3.9	0.7	11.4	内外面：ナデ	内外面：灰褐色4	土塗片体隙
C70	IV	Y21		6	4.95	5.0	0.55	17.2	内外面：ハケメ	内外面：灰褐色1	土塗片体隙
C71	I	G14	12	5.7	5.9	0.95	36.6	全面：ケズリ/外側：ナデ	全面：灰褐色3	土塗片体隙	
C72	I	F14	10	5.8	3.7	7.7	7.9	ぼば完形	全面：ナデ	側面及び底面に鋼鋸文鏡刻	

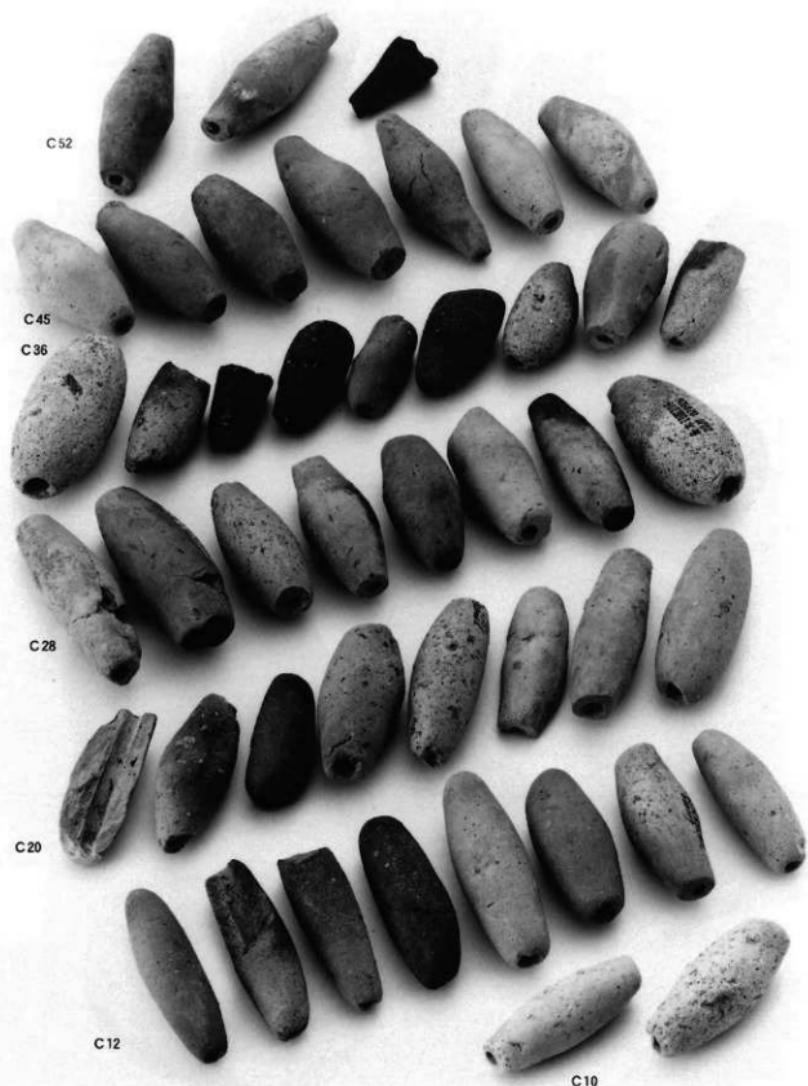


第94図 管状土錘実測図①



第95図 管状土錘実測図②・土玉・紡錘車・有孔円盤実測図

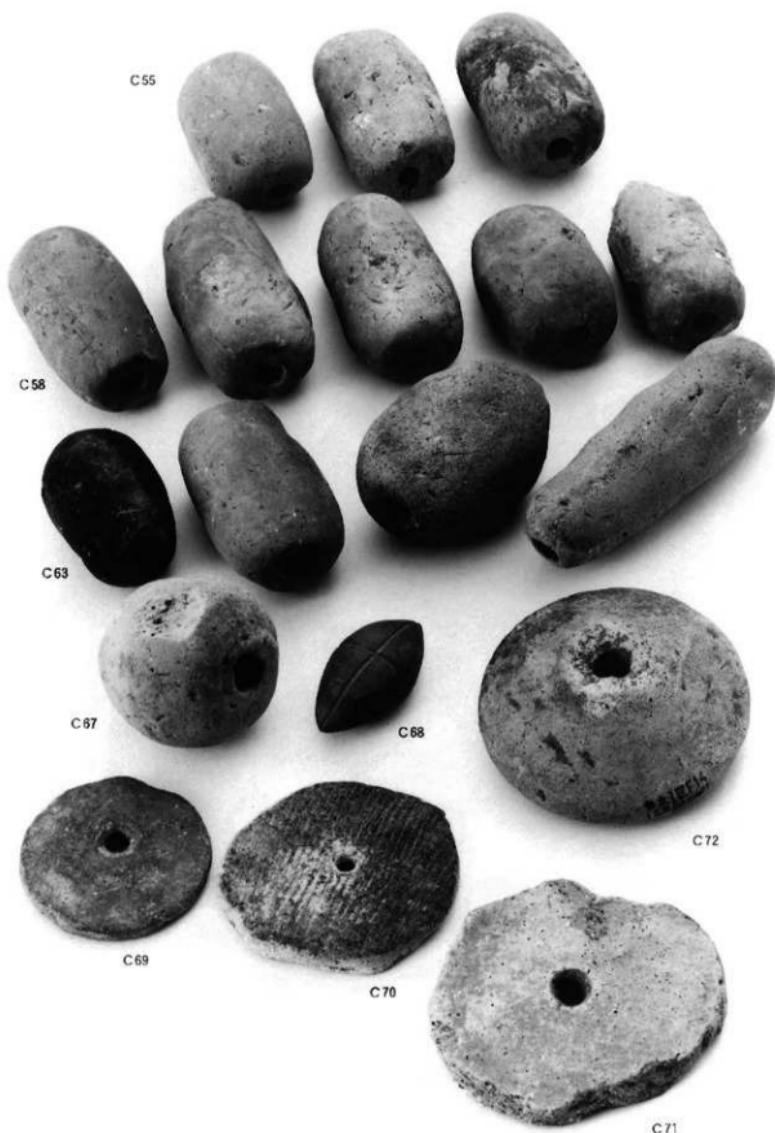
写真図版九〇 土製品／管状土錘



左から右へ掲載順

写真図版九一

土製品／管状土錘・紡錘車・土玉



第3節 石器・石製品

1. 組成と石材・時期

組成

52点の石器・石製品が出土している（114と117は接合したため1点とする）。磨製石器の収穫具・伐採工具の割合が高く、石包丁7点、石斧11点（扁平片刃石斧2点と両刃の伐採石斧9点）が全体の35%を占める。そのほか複数出土したものとしては、紡錘車4点、石鎌3点があり、付随するものであるが砥石10点がある点も特筆される。

石材

石材については中村唯史氏（三瓶自然館学芸員）に鑑定いただいた。第31表にそれぞれ記載している。磨製石斧に用いられた石材は塩基性変岩と安山岩類のものが同量認められる。塩基性変岩は江津浦辺などに産出するが、遺跡周辺の出雲では产地が知られていないもので注目される。石包丁は頁岩が多く、これは基本的に周辺で产出するものである。ただし115は四国一紀伊半島にのみ产出するもので、確実な搬入品といえ汁目される。搬入品もしくは石材の移動の面では、118は安山岩の石槍（尖頭器）であるが、鱗状結晶の様子や色調、硬度（音）からみてサスカイトの可能性が高い。また148の勾玉は質が悪いがヒスイとみられ、広域流通が背景に想定されるものである。

その他の石材については特に近隣で見られないものは無く、基本的に石材の採取から加工、使用までが完結するものである。多く出土した砥石も砂岩や凝灰岩など出雲平野で多く产出するもので、特に特徴的なものは見られない。

時期

本節では弥生時代の遺物として掲載したが、出土状況から明確に時期を特定できるものは少ない。確実に弥生時代に属するものは、基本層序I区12層とIV区7層中のものだけである（27ページ第14図層序模式図参照）。大半の石器・石製品はそれより上層に堆積した古墳時代～奈良・平安時代の遺物包含層中に混入する形で含まれており、時期を判断することができなかった。したがって、遺物自身の形態等の特徴から、整理して掲載することとしたが、一部玉類のように古墳時代のものと想定されるものも含まれている。

2. 武器・狩猟具

石鎌・二次加工剥片（101～104）

101は安山岩製の石鎌。抉りなく、平面三角形。基部成形の打撃により大きな剥離面が形成され、浅い抉れ状の平面形をなしている。刃部の調整は雑で、幅のある面を残す箇所もある。重量0.8g。102は黒曜石製の石鎌。重量0.3gと非常に小型のもの。平面形は抉りのない三角形。表裏の剥離面の打撃は90°回転方向から加えられたもの。基部と片側の刃部は細かな押石剥離が異なるが、他方の刃部は先端近くのみ調整される。103は黒曜石製の石鎌未成品か。平面形は三角形で鎌形をなすが、厚さ7.4mmと分厚い。出土層位は古代の包含層。

103と104は加工工具等の用途が想定されるものであるが、素材が黒曜石であるものをまとめてここで扱う。

104は刃部を二次加工した剥片か。黒曜石製。若干風化が進んだ縁の3面が角をなす部位から得られた剥片を、先端の側面から細かい調整を加えている。105は黒曜石製で楔形石器とされるものか。縦長の剥片の両端部は使用により刃がつぶれた状態になっている。

石槍（118）

118は長さ10cm程度に復元される中型の打製尖頭器で、ここでは石槍として扱う。向面が部分的に研磨されていて、断面は杏仁形。上端を欠き残存長77mm、下端は向側からの打撃により5mmほどの茎状の突起をつくりだす。

突起位置は中軸からずれている。両刃部は両面からの細かい調整がみとめられる。安山岩であるが、鱗状結晶の様子や色調、硬度（叩いた時の音）からみてサヌカイトの可能性がある。IV区の古代の包含層中から出土した。

磨製石劍 (122)

磨製石劍122はIV区の北東端近くから出土した。四隅突出型墳丘墓（3号墓）の墳丘内側にあたる地点で、弥生中期後葉～後期中葉の包含層中に含まれていた。石材は緑がかった灰色を呈する凝灰岩で、斑状構造物を多く呑み込むもの。茎端から圓、刃部の基部近くにかけて残存し、残存長112mm、茎端部幅32mm。莖は長さ64mm、刃部は基部で幅41mm、厚さ16.5mm。刃部は鎌の位置に加わった打撃により折れ、先端を欠く。断面菱形で、明瞭な鎌をもつ。鎌は莖にかけて面をもって広がっていく。刃と連続する莖の側面は、わずかに設けられた溝を境に削られて面をもつ。刃部は丁寧に研磨され光沢をもつが、莖の研磨は粗く擦痕が多く残す。

3. 土掘具

打製石斧 (106)

106は打製石斧（鐵）。厚さ22mmほどの流紋岩の板状素材を使用し、先端付近の両側を中心にして調整が加えられている。基部は直線的な破面を呈するが、これは二次的に破損したものであって、本来の形状はより長いものであったと考えられる。古代の包含層中から出土している。

4. 調理具

敲石・石皿 (107～109)

107と108は自然の凹縫に使用跡跡が認められるもので、いわゆる敲石にあたる。107は半円形が正円に近く、潰し作業に使用された痕跡が側縫全周をまわる。特に一端は大きな剥離によって50×27mmの平面が作られており、剥離面の中でも使用によって摩耗が認められる。表面の中央部は潰瘍によるくぼみが発達している。使用による潰瘍がある部分以外は自然凹凸が進んでおり、つるつるの摩擦面が残る。

108は半円形が長楕円を呈するもので、側縫は長軸・短軸の両端、計4箇所が潰し作業に使用されている。表面の中央部はくぼみが広く形成されており、両面とも2つのくぼみがつながる形をなしている。

109は上面に大きくくぼみをもつ縫で、石皿・凹石とされるものである。出土しているのはごく一部の破片であり全体形は不明であるが、高さ9cmほどの自然の凹縫を使用したものとみられる。下面は明瞭な平坦面が形成されており、人工的な摩擦面の可能性がある。この面も擦り潰し加工などに使用されたことが考えられよう。

5. 収穫具

打製石臼丁 (110～117)

7点が出土している。なお、114と117は別個体として図示したが、接合し同一個体であることが判明した。

110は側縫に抉りをもつもので、刃縫は直線的（ごくわずかに弧をなす）、背縫は弱い弧を描く。刃角はゆるく、70°程度。器幅64mm、最大厚13mm、欠損のため全長は不明。正面の刃側半分ほどが主に研磨され、背面は剥離面を残す。図上右側の面は大きな剥離によってえぐれが生じている。使用痕跡は弱く、光沢面は認められない。刃部にも成形跡の擦痕が残る。石材は塩基性岩という以上は判別できない。

111は破片のため全形が明らかでないが、側縫に抉りをもつ可能性があるもの。抉りとみられる部分から背面にかけて、削れて失われている。最大厚16mmほどで、他のものと比較して厚い。刃縫は直線的で、側縫にかけて弧を描く。刃角は50°程度だが先端が丸味をもち鈍い。上面は表裏とも剥離面でなく、風化の進んだ礫面を粗く研磨しているため、あらかじめ形状が板状の素材を利用したものとみられる。刃部にみられる使用痕は、図上右側の面には顕著でない。一方、岡上左側の面は刃縫に直交する方向の線状痕が発達している。光沢はそれほどみられない。側縫は抉りを成形する際とおもわれる両面からの打撃による剥離が認められる。石材は流紋岩で、や

や軟らかくぬめっとした質感を呈する。

I12は最大厚9mm、両側を欠く。背縁は刃縁に対して大きく斜行し、直線的な面をもつ。これは本來の形状と考えにくく、二次的な破断と考えた。刃部の研磨は刃縁に直交する方向に加えられ、先端の上上げ磨きが平行方向に入る。上面の背側は平坦な剥離面をそのまま残している。成形時の研磨が刃先まで明顯に残っているなど、使用にともなう痕跡がほとんどない。刃角40°ほどで先端は鋭利に保たれている。石材は貝岩。

I13は厚さ6mmの薄手のもので、平面形は刃縁が弧を描き側辺は直線的。背縁は欠損している。素材は平坦かつ厚さの均一な板状に剥離したものが用いられている。研磨は刃側の幅約1cmだけ加えられており、刃縁に平行な擦痕を残す。使用痕は中央部に顕著に認められ、弱い光沢面を呈する。ただし光沢面の部分にも成形時の擦痕が消えきらずに残り、それほどの使用ではない。刃部には両面からの剥離が連続してみられ、刃の再調整を打撃によっておこなったものとみられる。刃角は40°ほどで、石材は凝灰質貝岩。

I14とI17は同一個体。左側に配置した図で、I17が左、I14が右の状態で接合する。平面形は、刃縁が明確に内湾するもので、側縁と背縁については欠失しており不明。刃部は使用による光沢面が顕著で、特に図上左側の面に著しい。使用面は刃縁に対して平行でなく、右へむけて広がっている。刃先は両面からの打撃によるやや大きめの剥離が連続しており、なまつた刃を付け替える意図で使用時に加えられたものとみられる。剥離面も一定の摩耗がみられることから、その後も使用されたものと判断される。残存する最厚部で9mm、刃角は50°ほど。石材は流紋岩で、背側にこされた剥離面は平坦。

I15は紫紅色を呈する結晶片岩が用いられており、光沢をもつ微細な結晶が全面に表出する。四国一紀伊半島にのみ産出するもので確実な撮入品といえる。厚さ3.5mmの薄い板状素材が使用され、研磨は幅4mmある刃部のみ加えられている。刃部の使用痕は図上右側の面に顕著で、左側の面はほとんど使用痕跡が認められない。刃縁は直線的で、側縁は弧をなす。刃角は60°ほど。同様の結晶片岩は玉用砥石に用いられることが多く、石包丁以外の用途も考えられる。

I16は刃縁が弧を描き、側縁は刃に対して60°ほどの角度をなし直線的に加工される。側縁は片面からの施溝後折り切削し、さらに破面を研磨している。器幅は現状で88mmあるが、背縁は若干欠失しているようである。図上左側の面は右利きの場合の主要使用面にあたり、使用による摩耗と光沢面の形成が認められる。光沢面は刃縁から10mmほど離れた部位に顕著で、光沢の度合いは弱い。研磨は刃部幅20mmほどにわたって、刃に平行方向に加えられている。正面の背側は剥離面のままであるが、局所的に粗く深いキズを残す研磨が行われている。石材は貝岩で、厚さ5.0mmの薄い板状素材。刃は鋭く刃角40°ほどをなす。

6. 漁撈具

石錐 (I19)

砂岩製の大型の石錐。やや絶縁の球形で、中央部に割り込みがめぐる。割り込み内部は摩耗が顕著で、使用時の紛糾の可能性をもつ段差が認められる。現状は全体の4割程度が残存しており重量は2.3kgであることから、本來は5kg程度のものであったと考えられる。I1区12層から出土しており、弥生中期後葉以前のものと評価される。これ以外の漁撈具としては、土製品の箇に掲載した小型の石錐1点と、管状石錐が多数出土している。

7. 伐採具・加工具

扁平片刃石斧 (I20・I21)

2点出土している。I20は基部にかけて細くなる形状で、側面はゆるやかに外反する弧形をなす。刃は主軸に垂直でなくやや傾いてつけられている。研磨は全面に施されているが、消しきれなかった砾面の凹凸が表面に多く残る。身と刃部の境は明瞭な稜線をもつ。裏面は平面的で、完全な片刃をなしていない。刃角は45°。刃の向端には剥離が認められ、使用に伴う刃こぼれの可能性がある。また、基部近くに大きな剥離があるが、剥離面の縁

に摩耗が認められることなどから製作時か使用時の割れであるとみられる。排水溝掘削時の出土のため層位不明で、詳細な時期は言及できない。

121は細身のもので、側面形が内湾する。刃部は端を欠くが復元幅37mm、これに対して基部幅は26mmと細い。研磨は全面に及び丁寧に施されるが、側面の研磨はやや粗い。裏面はわずかに曲面をなすが、明確な片刃を志向している。刃先は刃こぼれとみられる小さな剥離が3箇所あるほか、端を大きく割れによって失っている。出土層位は山脚時代以前の遺物を含む包含層で、時期は既定できない。

伐採石斧（127～135）

両刃の磨製石斧で、いわゆる大型始刃石斧と呼ばれるものである。9点が出土している。断面形状の大味や、基部から刃部への広がり具合などで複数の系統のものが含まれるようだが、残存状態の制約もあり明確に判別できないためにここでは区別せず掲載している。

128は側縁が平行かつ側面を面的に研磨するもので、断面形状も円形ではなく隅丸長方形をなす。また135は基部から刃部にかけて広がる平面形で、刃部近くに最大幅をとる。この2点は他のものとはやや形態が異なる。それ以外のものは刃部が広がらず両側縁が平行に近いもので、厚みがあり身部断面形は円形に近い。

端部が残存しているもので使用痕跡をみると、刃部に剥離があるものが多く、基部端にもなんらかの打撃痕跡が認められる。刃部を残すものでは128だけが全く使用による刃こぼれ状の剥離がなく、刃の摩耗も無く鋭い刃先を残している。

8. 紡織具

紡錘車（123～126）

凝灰岩製の右製紡錘車4点が出土している。124だけが弥生中期の包含層に含まれていたが、それ以外は古代の包含層中から出土している。いずれも三角形の面内に山形文を鏡面状に配置するという施文基調が共通するが、文様の彫りが浅いことと、表面の風化が進んでいることによりかすかに観察できる程度である。孔は錐状工具によって回転穿孔された凹孔で、径は124が7.4mm、126が7.6mm、125がひとまわり大きく9.5mmであった。施文は、側面に上向きの三角形を横並べ、下面に向向きの三角形を放射状に並べてそれぞれ大きく区画をつくり、その内部に小さな山形文を連ねている。使用された工具は針状の鋭いもので、下書きせずフリーハンドで描かれたようである。上記4点の石製紡錘車のほか、土製紡錘車1点が出土している。

9. 砧石

定形砥石（136～141）

直方体に近い形状で、小口面をのぞく各面が砥面として作業に使用されているもの。6個体出土している。石材は凝灰岩か流紋岩で、いずれも粒度はかなり細かい。使用による凹面が発達しており、凸型の曲面をもつ対象を研磨したものとみられる。ただし139だけは尖なり、凹みがほとんどない直方体で、幅の広い2面が主に使用されている。139は出土層位が古代の包含層であり、他のものとは時期が異なる可能性も考えられる。使用痕跡からみて鉄製の利器研磨に使用された可能性が考えられよう。

小型の砥石136と138は断面台形をなすもの、137は断面正方形をなすもので、いずれも4面が砥面として使用されている。138は端面に鋭い切り込みが3条入っており、金属器での加工が想定される。

140と141はやや大きめの砥石で、主となる砥面は大きく摩耗し凹面をなす。140は砥面中央が集中して使用されることにより、段差が生じた部分がありめらかではない。141は底面になる広い面が使用されておらず、鋭い傷状の切り込みが多数入っている。研磨の粗い工程の際に生じた傷の可能性がある。

筋砥石（142～145）

筋状の溝や凹みが作業面として使用されているもの。142は深さ6mm、断面U字形の溝が2条縦長に入る。溝

はゆるやかに蛇行しており、深さも均一ではない。置いて使用する際、上面は水平でなく斜めに傾いた状態になる。側面にも上面と同様の幅をもつ溝があり、粗い研磨が行われている。I43は深さ8mm、断面V字形の深い溝で研磨がおこなわれている。薄く直線的な工具の刃部を研磨する用途が考えられる。溝は2条平行しているほか、これと交わる浅い溝、斜行する溝が認められ、複数方向に繰り返し使用されている。I44は放射状に5条の溝が入った筋砥石で、溝の断面形は浅くゆるやかなV字形を呈する。石の粒度はやや粗い。I45は厚さ20mm弱の厚さ均質な板状のもので、50×18mm、深さ8mmの長楕円形の凹みが設けられる。一般的な筋砥石とは異なるものだが、丸味をもつ凸面を研磨するためのものとみられる。凹みの中はなめらかでなく、段差や擦り傷が多く残されていることから、それほど連続して使用されたものではない。むしろ、板状をなす広い面が繰り返し使用により平滑面を呈している。

10. 玉類

勾玉・管玉 (146~150)

勾玉2点、管玉2点が出土している。I46は小型の碧玉製勾玉で、I区の北東端近く(C15グリッド)の10層(古墳時代以前の遺物包含層)から出土した。コの字形の平面形で、腹部と側面の境に研磨の稜線を明瞭に残す。薄く、整形は雑な印象がある。片側穿孔される。古墳時代のものである可能性が高い。I47はメノウ製勾玉で、下半を欠く。材質は白色不透明で赤みは全くない。頂部が黒く変色しており、焼けによる被熱とみられる。片側穿孔される。古代の溝であるSD16の埋土中から出土しているが、古墳時代のものである可能性が高い。I48は濃い緑色で網目状の組織構造をもつ大型の勾玉。石材は分析していないが、ヒスイとみられる。C字の肩曲が強く、厚みが厚い。片面穿孔されるが、両口の径がそれほど変わらないため、先端があまりとがらない工具での穿孔が想定される。全体に作りは丁寧なもの。I区の2号墓北東側から出土しているが、埴丘を削る古代の遺構の埋土中に含まれていたため、直接2号墓と関係があるかどうかは不明である。なお2号墓は弥生後期(前葉~中葉?)の築造と考えられる。

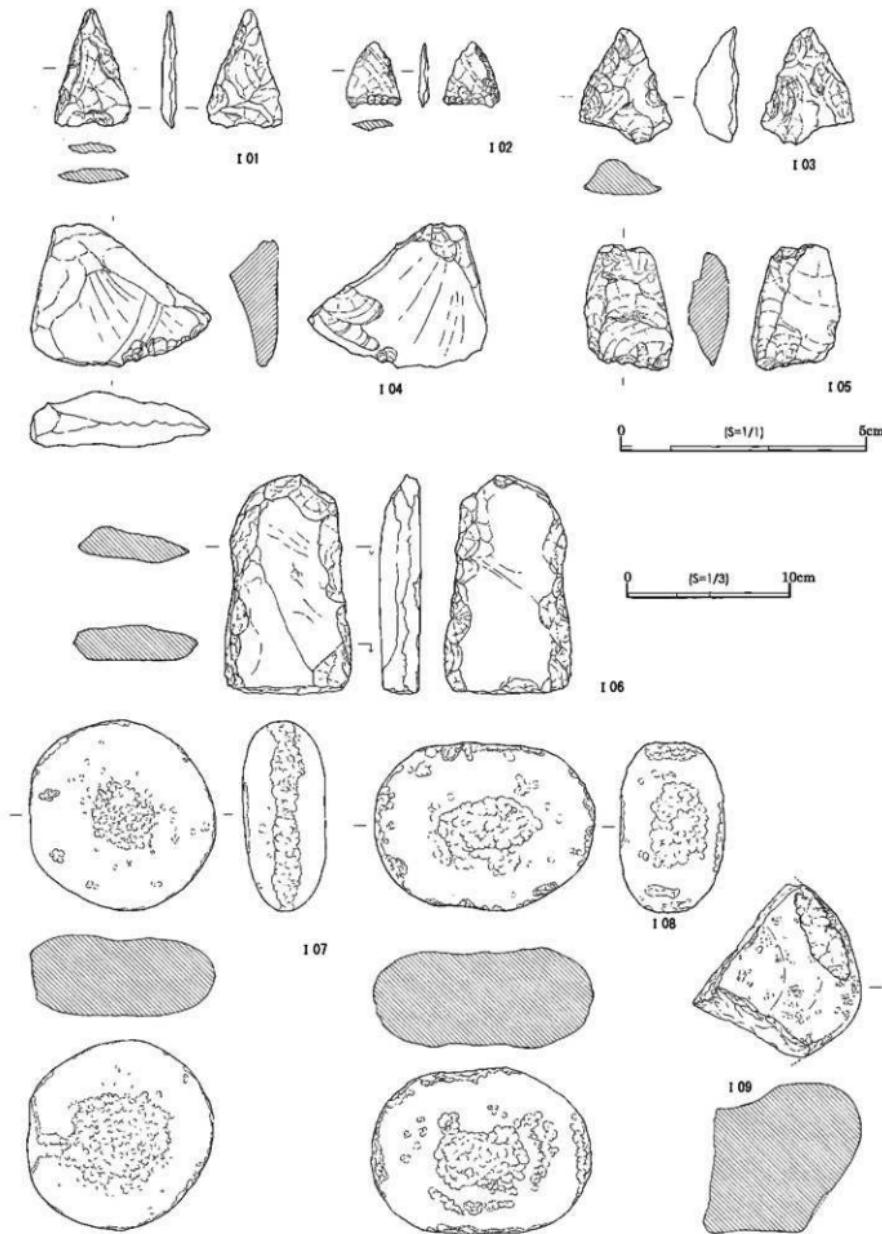
I49は碧玉製の小型の管玉。孔径2.5mmの両面穿孔。1号墓の北東側で、古墳時代以前の遺物を含む包含層から出土した。I50は緑色凝灰岩製の中型の管玉で、縦に半裁状態で割れている。両面穿孔されている。

玉素材・未成品 (151~153)

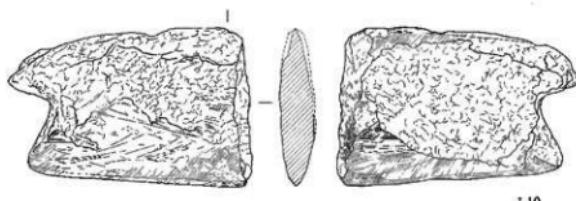
I51は水晶の結晶体。人工的な加工かどうか判別できないが、上端付近には剥離面がある。下端は不規則な折れ面となっている。I52は水晶(石英)の縦長の剥片で、側面には細かな調整剥離が認められる。工作に関わるものか判断できないが、人工的な加工が加わるものとして掲載した。I53は緑色凝灰岩の板状素材。研磨により平坦に整形され、表面に擦痕を多く残す。側面は擦切りで直線的に切断されているが、研磨されているため破断面はない。厚さ4.8mmと薄く玉素材であるか断定できない。

第31表 石器・石製品 観察表

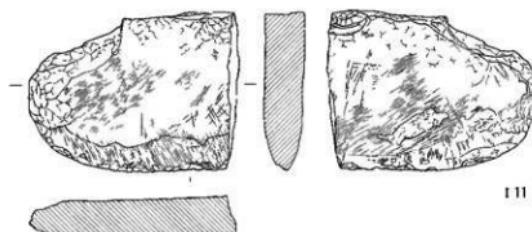
番号	地区	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率	石材	備考
I 01	I	F14	12	石器	2.4	1.5	2.5	0.8	完形	安山岩	抉りなし 三角形石器
I 02	I	C	石器		1.3	1.1	0.2	0.3	完形	黒曜石	抉りなし 三角形石器
I 03	N	A21	5C	石器	2.35	1.85	0.7	2.7	完形	黒曜石	未製品
I 04	I		二次加工片か		2.95	3.65	1.0	10.0	完形	黒曜石	
I 05	N	C19	5C	複形石器	2.6	1.8	0.8	3.9	完形	黒曜石	
I 06	I	C16	10	打製石斧	13.35	7.65	2.5	327.9	完形	流紋岩	
I 07	I	F13	11	敲石	11.4	11.7	5.0	1042.8	完形	安山岩	面面中央・周縁ほぼ全面に溶出 面面中央は使用によりくぼみあり
I 08	I	G15	11	敲石	13.45	10.3	6.4	1253.0	完形	玄武岩	面面中央・周縁ほぼ全面に溶出 面面中央は使用によりくぼみあり
I 09	I	G15	12	石皿	(10.7)	(10.25)	9.2	1124.1	全体の10%以下	安山岩	
I 10	N	Z20	6	石盤	(9.9)	6.4	(1.5)	132.7		塊状性岩	抉りあり
I 11	I	G14	12	石包丁	8.35	6.55	1.6	146.7		流紋岩	
I 12	I	D14	石包丁	7.1	7.1	1.0	72.2		頁岩		
I 13			石包丁	9.2	3.9	0.7	33.3		凝灰質岩		
I 14	N	C20	6	石包丁	(7.05)	(4.9)	1.0	50.4		流紋岩	刃部ボリッシュ I17と接合
I 15	I	S溝	石包丁か	6.4	5.3	0.45	19.3		鈍品岩(細粒岩)		
I 16	I	S溝	石包丁	10.0	6.85	0.6	40.2		頁岩	刃部ボリッシュ	
I 17	N	B18	5C	石包丁	(3.4)	(3.55)	0.8	15.3		流紋岩	刃部ボリッシュ I14と接合
I 18	N	Z20	5C	石槍	(7.7)	2.9	1.1	31.2	ほぼ完形	安山岩	部分研磨
I 19	I	G15	12	石鍬	17.3	(13.35)	(10.0)	2300.0	全体の40%	砂岩	窓内采石跡
I 20	I	C17	扁平片刃石斧	9.0	5.7	1.2	120.0	ほぼ完形	凝灰岩		
I 21	I	C16	扁平片刃石斧	9.9	(3.6)	(1.3)	89.7	ほぼ完形	凝灰岩		
I 22	I	F13	10	磨製石劍	(11.2)	4.2	(1.8)	93.2	凝灰岩(縫)		
I 23	N	E21	5C	磨練車			3.05	18.1	全体の30%	凝灰岩	鉛錆文様刻
I 24	N	A21	7	磨練車			(2.45)	46.6	全体の60%		鉛錆文様刻
I 25	N	C19	5C	磨練車	上端径 4.1	底面径 5.35	3.3	77.1	ほぼ完形		鉛錆文様刻か 淡赤色顕料付着か
I 26	I	X溝	10	磨練車			(3.0)	42.8	全体の50%		鉛錆文様刻
I 27	I	G15	11	伐採石斧	(9.3)	5.0	3.9	279.7	ほぼ完形	塊状性片岩	研ぎ減り
I 28	I	E16	9	伐採石斧	(8.2)	(5.6)	(3.3)	188.5	全体の40%	頁岩	
I 29	I		伐採石斧	(9.3)	(5.3)	(4.0)	304.2	全体の50%	安山岩		
I 30	N	Y21	7	伐採石斧	(12.4)	5.25	3.7	386.9	全体の90%	玄武岩	
I 31	I	G15	11	伐採石斧	(9.3)	(4.7)	(4.0)	202.6		塊状性片岩	
I 32	I		伐採石斧	(10.9)	(6.6)	5.0	555.7		塊状性片岩		
I 33	I	F14		伐採石斧	(11.0)	(6.3)	4.6	563.2		玄武岩	
I 34	I	C16		伐採石斧	13.25	5.7	4.1	590.9	ほぼ完形	塊状性片岩	
I 35	I		伐採石斧	(12.5)	(6.9)	3.9	515.8	全体の90%	玄武岩		
I 36	I	G14	11	砥石	(8.8)	3.9	(3.2)	113.3		流紋岩	
I 37	I	F13	11	砥石	9.0	3.4	2.9	93.2		凝灰岩	
I 38	I	G14	11	砥石	(7.9)	5.1	(3.0)	101.8		流紋岩	上端面に3本の筆跡あり
I 39	I			砥石	(6.8)	(5.5)	(3.45)	193.5		凝灰岩	
I 40	I	F13	11	砥石	13.5	4.2	6.1	409.3	ほぼ完形	凝灰岩	
I 41	N	A20	7	砥石	9.8	6.35	3.15	239.5	完形	凝灰岩	長軸方向に平行の筆跡研ぎ痕あり
I 42	I	E15		磨礪石	(13.45)	(6.8)	(2.95)	267.3		砂岩	断面V
I 43	I	F13		磨礪石	(5.8)	(6.2)	(2.35)	73.6		砂岩	断面V
I 44	I			磨礪石	10.2	10.1	4.1	523.2		砂岩	断面U
I 45	I	D15	5	磨礪石	8.65	9.5	1.9	228.6		砂岩	断面U
I 46	I			勾玉	2.6	1.5	0.7	3.0	完形	碧玉	
I 47	I		2	勾玉	(2.1)	(1.9)	1.0	4.6	全体の50%	メノウ	
I 48	I			勾玉	3.8	2.4	1.6	21.3	完形	ヒスイ	
I 49	I	D14	10	管玉	2.05	0.6	1.1		完形	碧玉	両面穿孔
I 50	I			管玉	3.7	(1.5)		6.9	全体の50%	緑色凝灰岩	両面穿孔
I 51	I	C16	10	玉類	6.3	2.5	1.9	46.9		水晶	
I 52	I	F17	11	玉木成品	2.65	1.7	0.95	5.6		石英	
I 53	I	D16	Y1	玉木成品	4.75	5.05	0.5	16.2		凝灰岩	



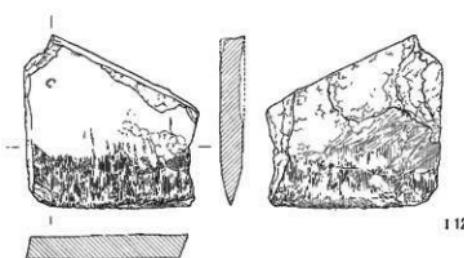
第96図 石器・石製品実測図①



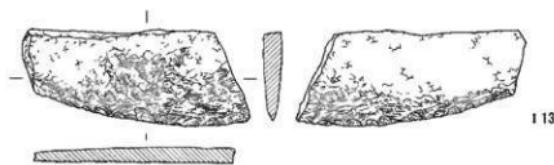
110



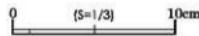
111



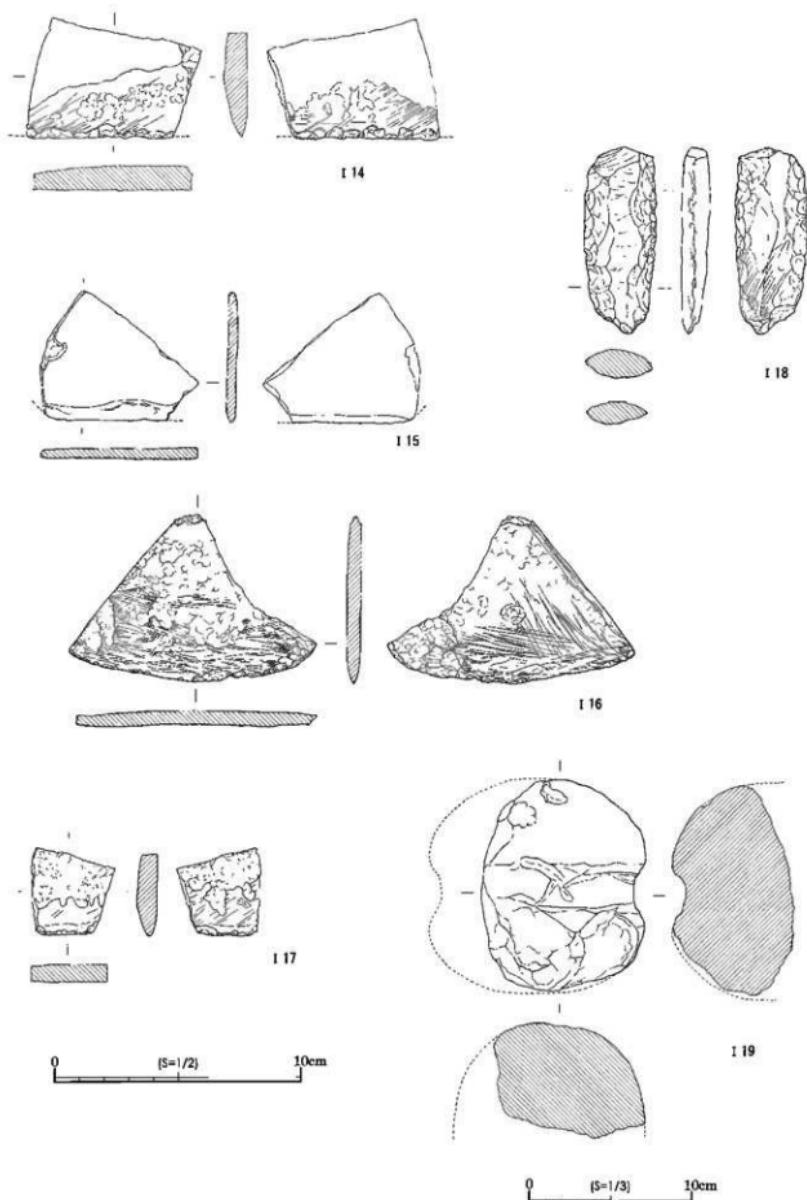
112



113



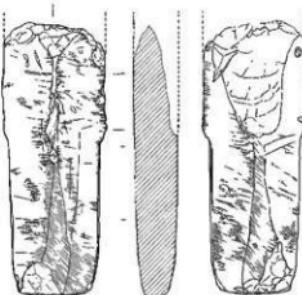
第97図 石器・石製品実測図②



第98図 石器・石製品実測図③



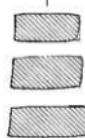
120



122



121



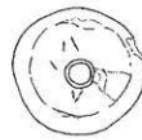
$[S=1/2]$
10cm
0



123



124

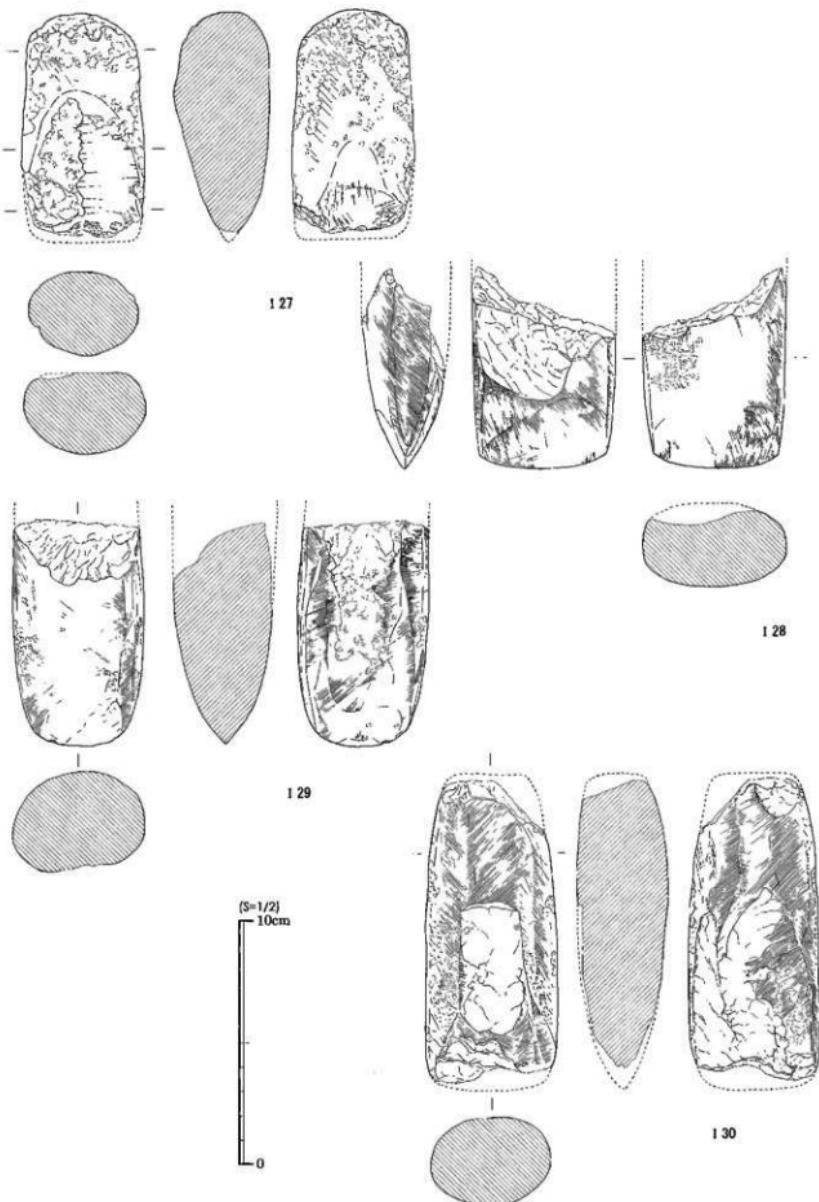


125

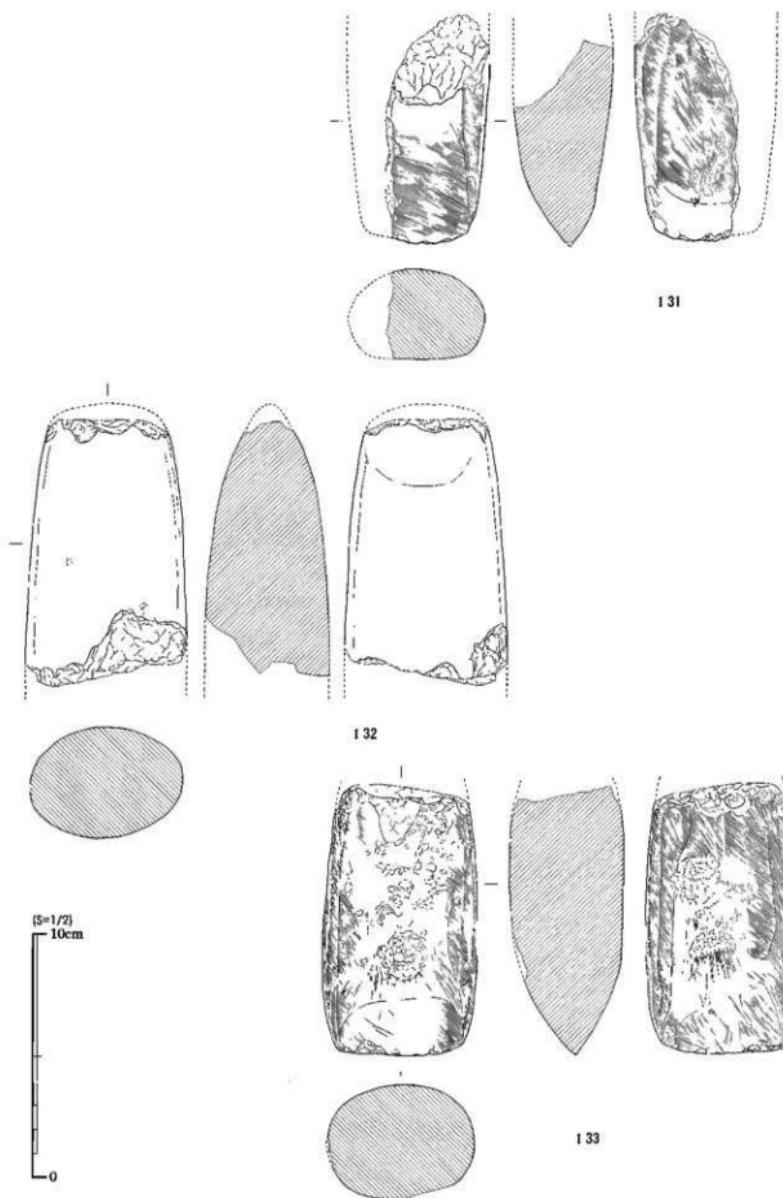


126

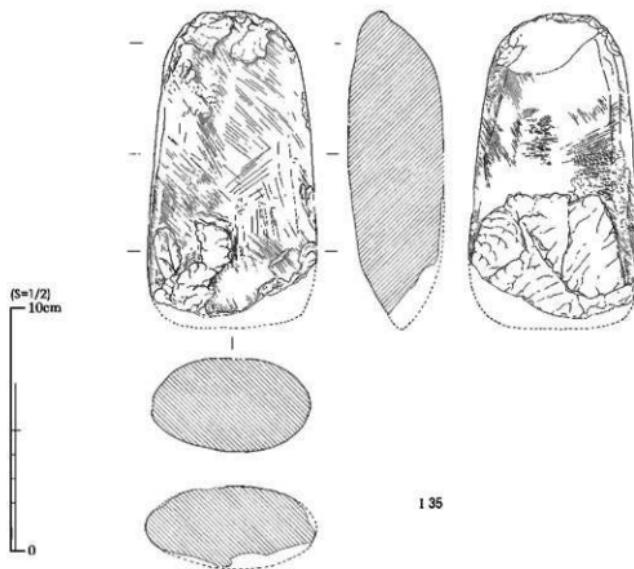
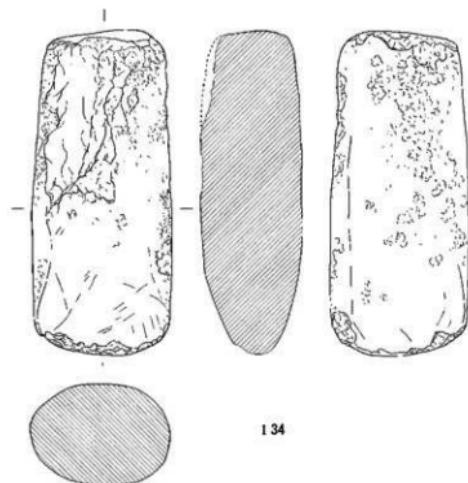
第99図 石器・石製品実測図④



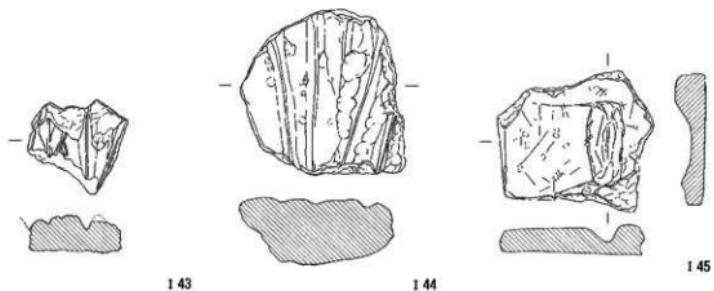
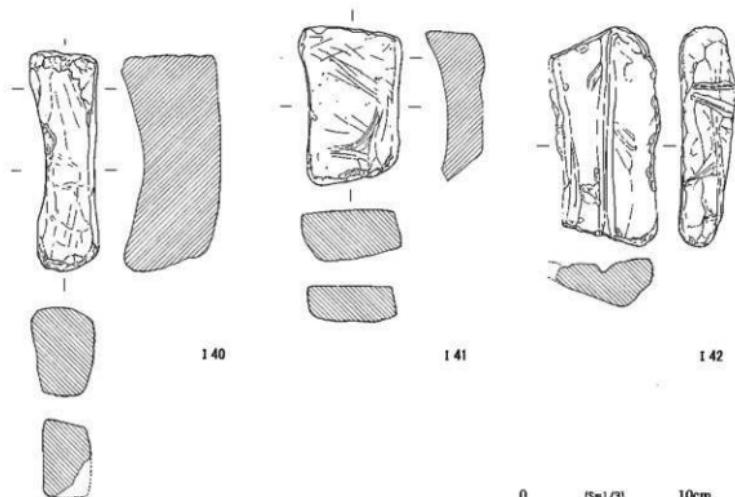
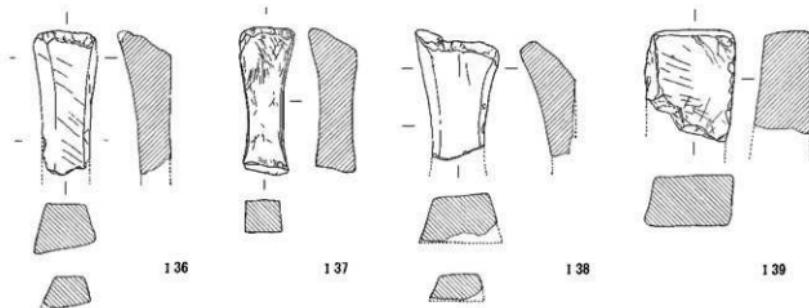
第100図 石器・石製品実測図⑤



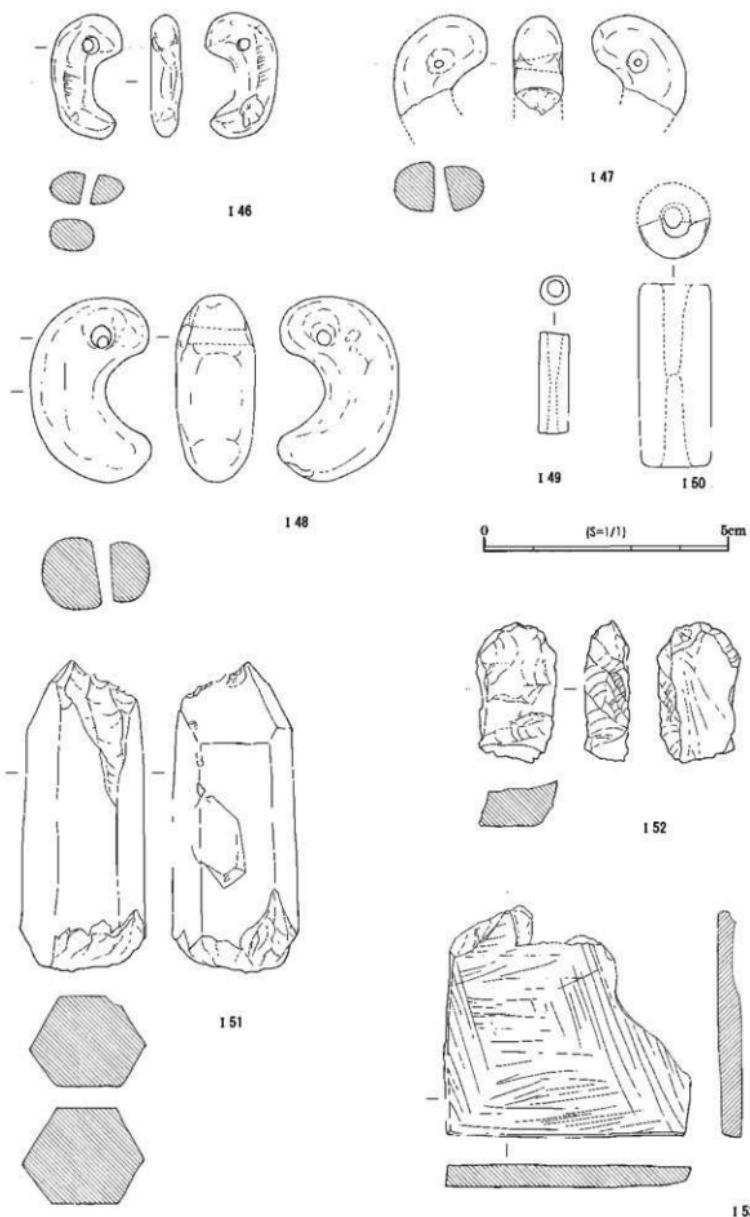
第101図 石器・石製品実測図⑥



第102図 石器・石製品実測図⑦



第103図 石器・石製品実測図⑧

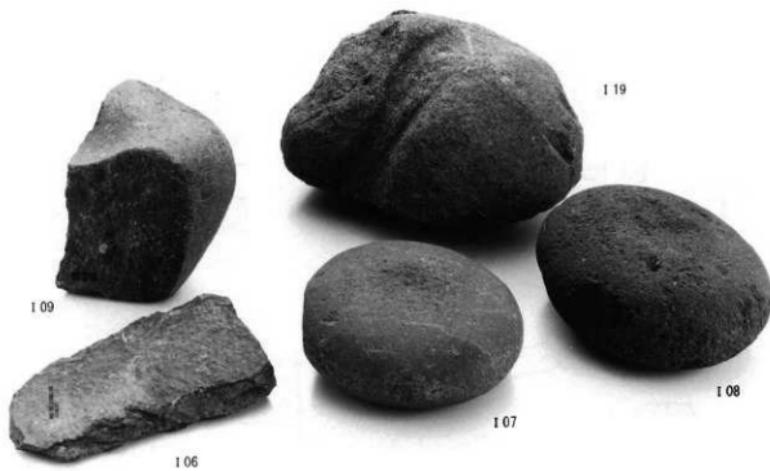


第104図 石器・石製品実測図⑨

写真図版九一 石器／石鎌・打製石斧・敲石・石皿



石鎌・刃部二次加工品



石皿・敲石・石斧・石鎌

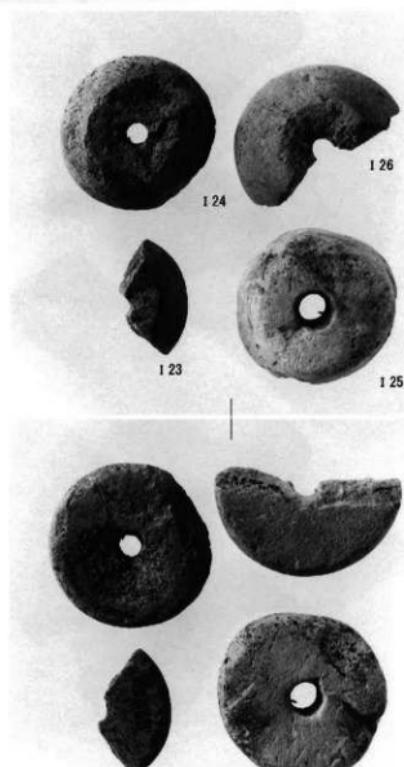
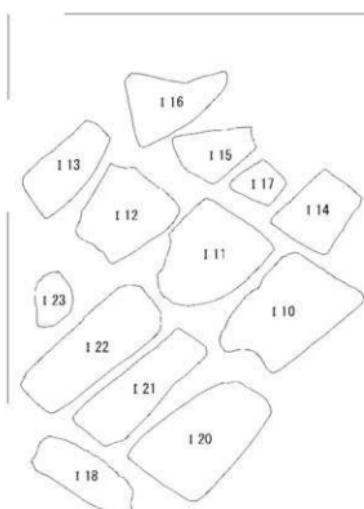
写真図版九二 石器／磨製石器／扁平片刃石斧・石包丁・石劍



遺物番号は次ページ

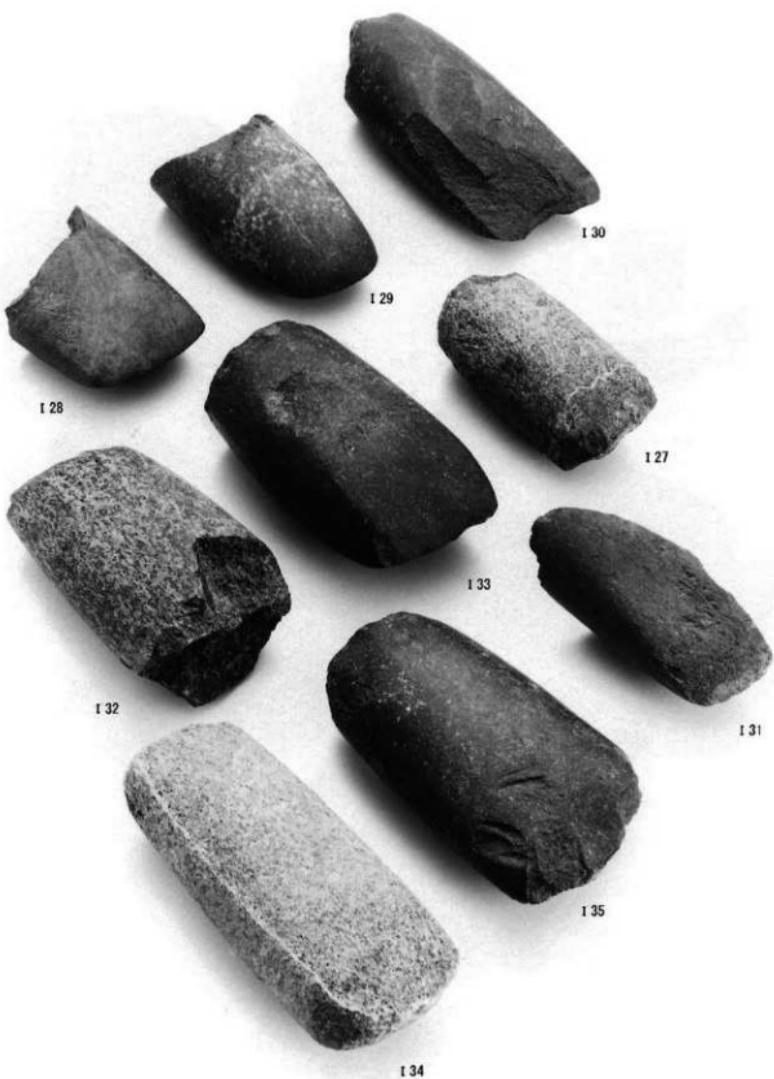
写真図版九四

石器／紡錘車



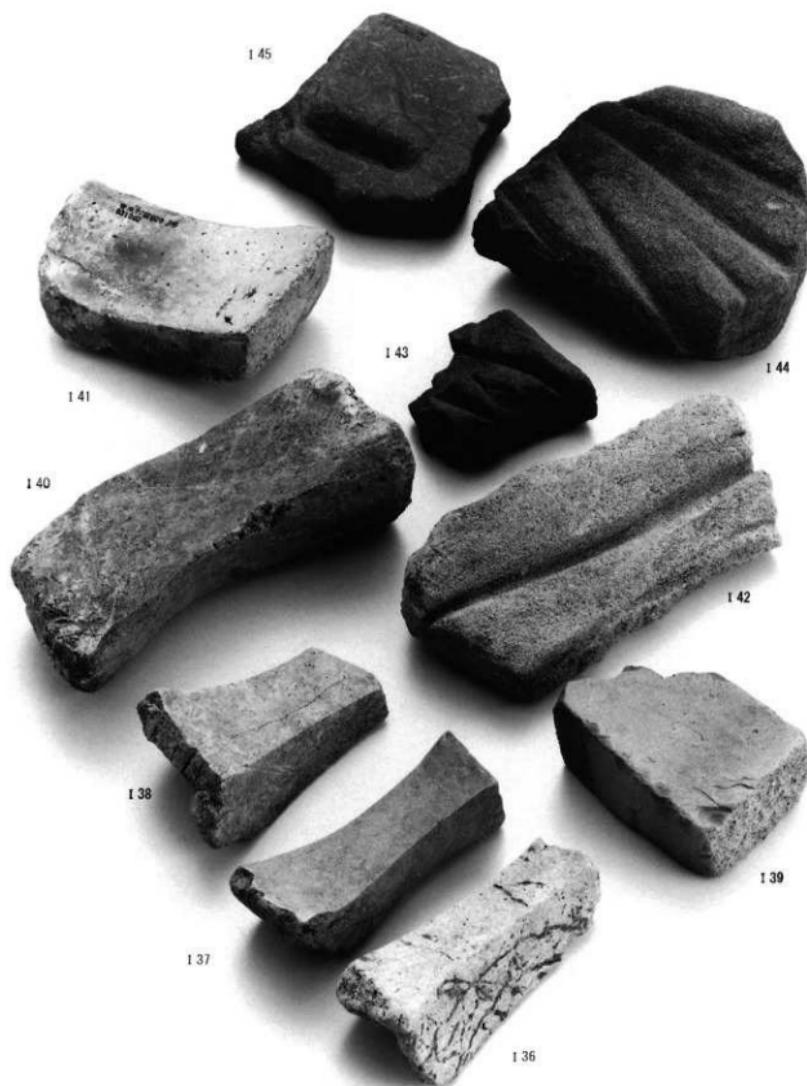
写真図版九五

石器／磨製石器／石斧

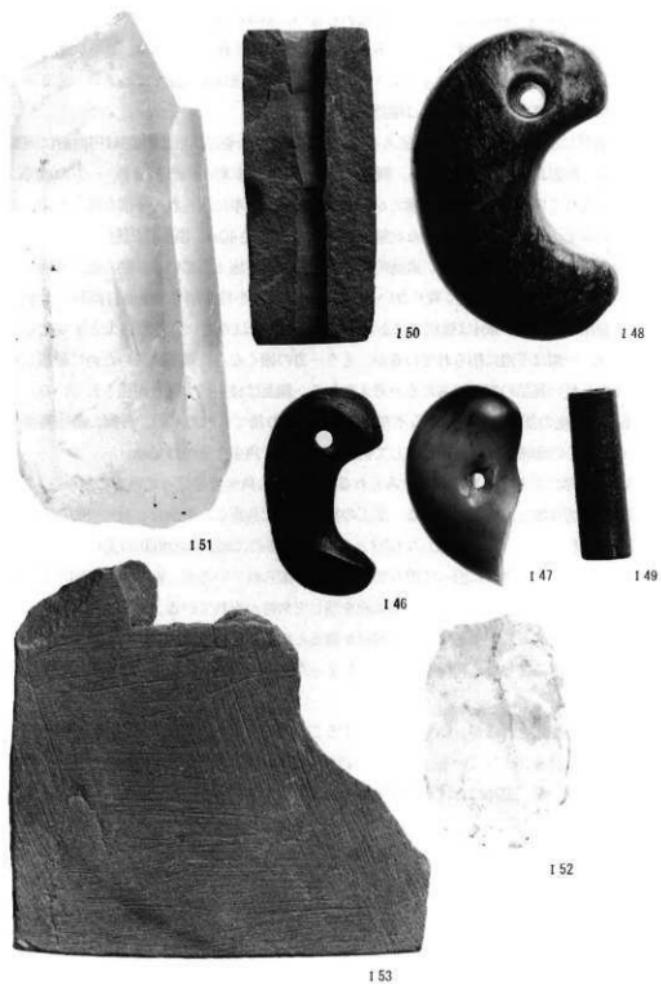


写真図版九六

石製品／砥石



写真図版九七 石製品／玉類成品・未成品・素材



第4節 鹿角製品

第105図B01～B08はニホンジカの角を加工した鹿角製品および加工痕跡を残す残材。

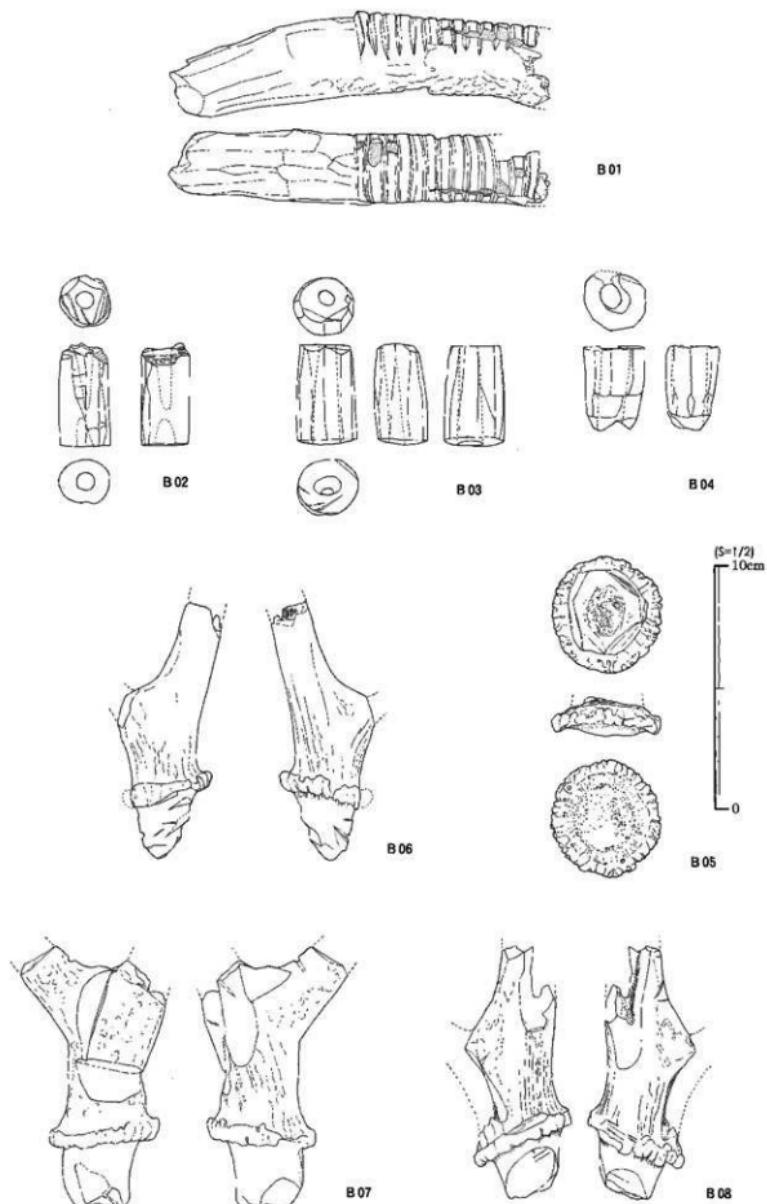
B01は棒状の鹿角に刻みを入れた製品。同様の付角器は刻骨などと称され、楽器としての「さら」やT具の柄、あるいは呪具の可能性などが想定されている。残存長15.5cmで、一端を欠損しているため本米の長さは不明。7.6cmにわたって刻みを入れられ、13列の凹部が削り出される。刻みを入れる面は丁寧に削られているが、その反対面は角表面の凹凸を残したまま加工が加わらない。刻みを施さない部分（図では左半）は全周にわたり粗く削られ、削りの単位の稜を残す。刻みのある部分より一段細く削られており、さらに端部で斜めにカットされている。端部の加工は粗く、折り取ったようにも觀察される。径は最大部で35mmあり、太さからみて角幹を使用したとみられる。枝部を除去した痕跡は確認できない。

B02～B04は管状に加工した鹿角で、製品あるいは加工途中の未製品。B02とB03は円筒形に両端を裁断し、側面を削ったもの。B02は長さ41mm、径20mm。側面の削りは浅く、本来の凹凸を残す。一方の端部は四面から階段状に切り込みを入れて切断したままの状態だが、他方の端部は丁寧に削られて平滑な面をなす。海綿状の體の部分は貫通しておらず、管としては不完全な状態である。B03は長さ40mm、両面横円形で長軸径24mm、短軸径21mm。端部は切断時の切り込みを多少残すが、直線的に仕上げの削りを施されている。他の孔は貫通する。側面の削りは深くB02のような本米の表面は全く残らないが、シャープな稜を残す削りで断面11面形をなす。B02・B03ともに細い部位を使用している。B04は管状ではあるが側面が直線ではなく、3段階に太さが変化している。長さ34mm、最大径26mm。一端は平滑に削られているが、もう一方の細くなった端部は薄いために破損しているよう、実際にはもう少し長い製品の端部にあたると考えられる。側面は棱を残す削りが施されている。

B05は角基部の角半の部分で、落角から不要部分として切り捨てられたもの。外側の緻密質部分に全周から切り込みを入れ、中心の海綿質部分を切り残して折取っている。角半全体の径46mm。

B06～B08は角基部にあたり、加工残材とみられる。いずれも角半を伴っていることから、B05のような落角ではなく頭骨から切り取ったことがわかる。加工の特徴はほぼ共通し、角半を斜めに切り込んで頭骨から取り外し、角幹と第一枝を切り（折り）取って用材としている。B07は幅25mmの板状の素材を採取しようとした痕跡を残しており注目される。角幹に沿って擦り切り状の溝が彫られているが、板状素材が切り離される前の状態で作業は止められており、折り取られたような破面を残して角幹が折れている。本来は角幹に沿って細長い板状素材を採取することを目的とし、少しでも長い素材を得るために角半近くから切り出し始めたと見られるが、何らかの理由でそれを完了することなく角幹を折取ってしまったものと考えられる。鹿角素材獲得の技法を窺う上で良好な資料である。

時期は弥生時代と想定されるが、いずれも限定することができない。奈良～平安時代の遺構埋土や遺物包含層から出土したものなども含まれている。なお、上記鹿角製品以外にはサメの椎骨3点が出土しており、人工的な加工は加わっていないが、遺跡における食料獲得を示す自然遺物として写真を掲載している。

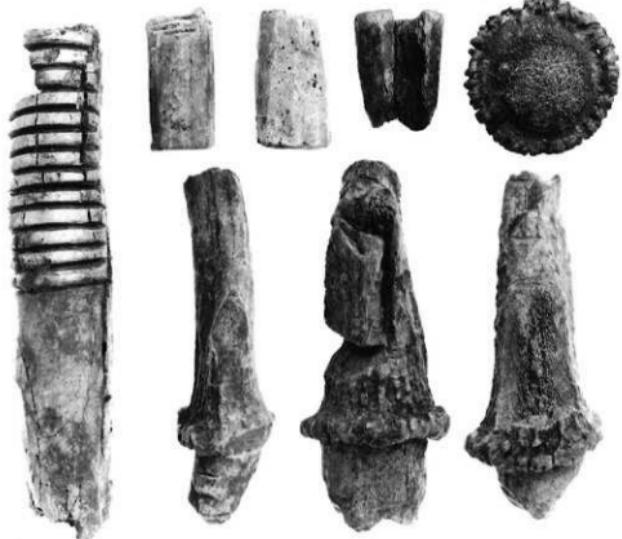
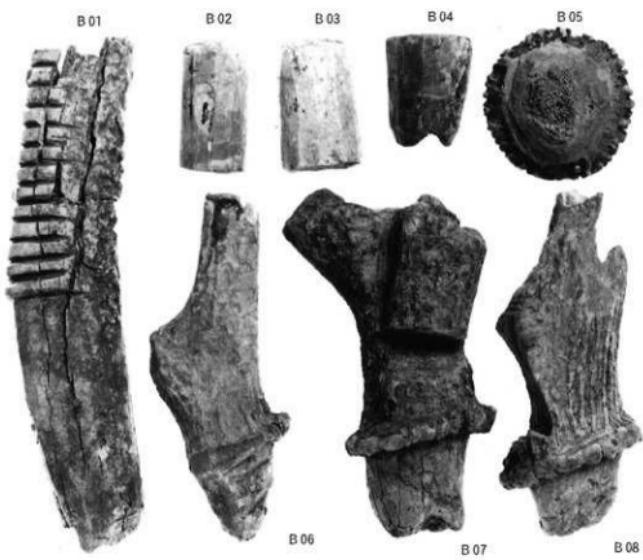


第105図 鹿角製品実測図

写真図版九八
鹿角製品



写真図版九九
鹿角製品



第6章 古墳時代・遺構と遺物

第1節 遺構の詳細

古墳時代の遺構はI区で確認した。調査区の北西寄りに位置し、1号墓の北東及び南突出部の上面から東へとびる2箇所の集石遺構である。この集石以外には古墳時代に関する遺構は確認できなかった。

1. 3号集石

3号集石は1号墓の北東突出部の上面から東に向かってのびる集石遺構である。

集石の規模は東西約9m、南北約3mを測り、拳大～50cm程度の円礫や角礫で構成されている。石の隙間に少量の須恵器片を伴っていたが図化はできなかった。

時期については第11層上面に造られていることから古墳時代中期以降と考えられるが、その性格については把握できなかった。

2. 4号集石

1号墓の南突出部上面から2号墓の南辺にかけて広がる集石遺構である。

集石の規模は東西約13m、南北約3mを測り、平面形態は中央付近で屈曲して「く」の字状を呈している。拳大～55cm程度の円礫や角礫で構成されている。

遺物は石の隙間から須恵器の环や高环、土師器の甕などが出土しているが、東端側では大型の須恵器甕の破片が石と併に敷かれるような状態で出土している。また、西端側から4m東の位置で大刀が1本南北方向に向いた状態で出土した。

時期については出土遺物から古墳時代後期頃と考えられる。性格については明確には判断できないが、大刀が出土していることや須恵器甕が破碎されて敷かれていることなどから祭祀的な用途をもっていたもの可能性が考えられる。

3. 4号集石出土遺物

須恵器（第108図～第109図1）

1～4は蓋である。肩部に沈線を有するもので、天井部は丸みを帯びている。5～13はたちあがりを有する环身で、たちあがりはやや短く、端部を丸くおさめている。14は内湾してのびる口縁部を有する环身で、底部は丸みを帯びている。15～20は高环である。内湾する环部をもち、口縁部が外反するものもある。脚部は緩やかに開き20のように端部が下方に屈曲するものも見られる。透かしは方形とスジ状のものがある。第109図1は甕の口縁部で、外反する口縁部の外面にヘラ記号を有する。

土師器（第109図2～5）

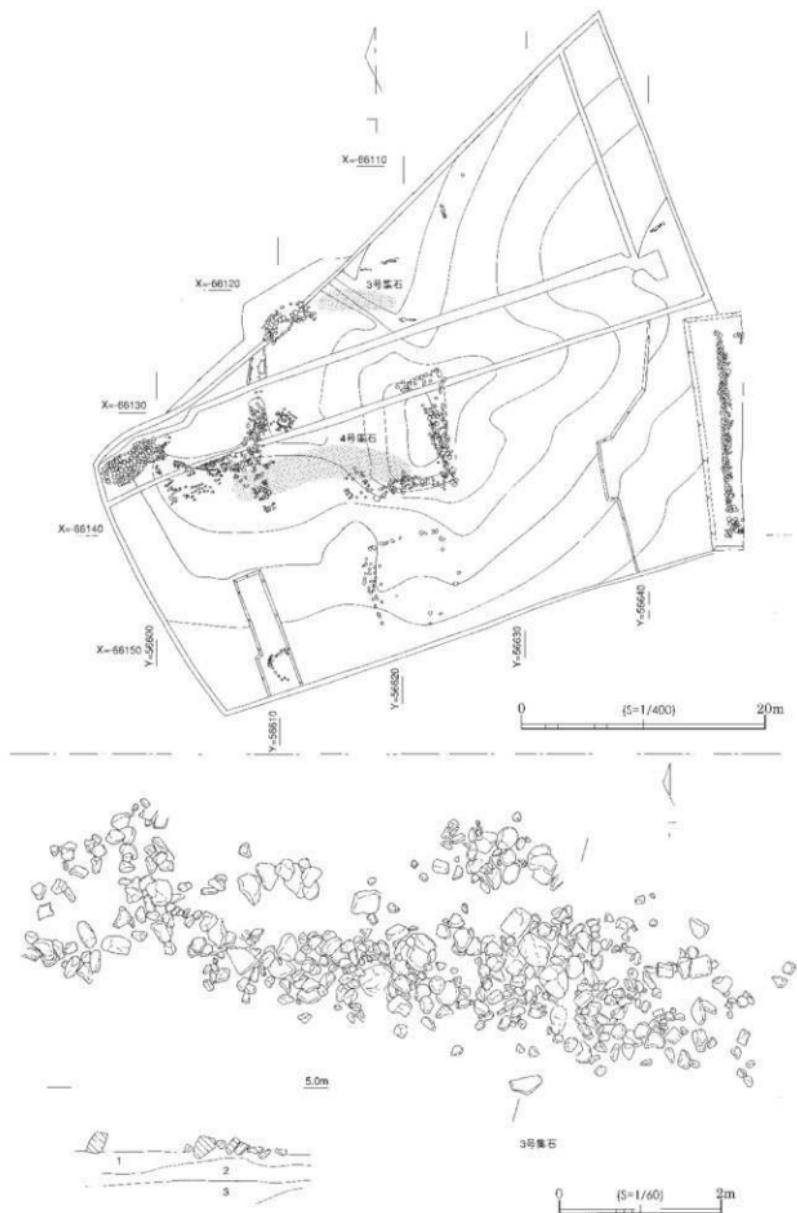
2～4は甕で「く」の字状に外反する口縁部を有するものである。5は小形の甕で口縁部は短く外反し、肩部が張るものである。

鉄製品（第109図6）

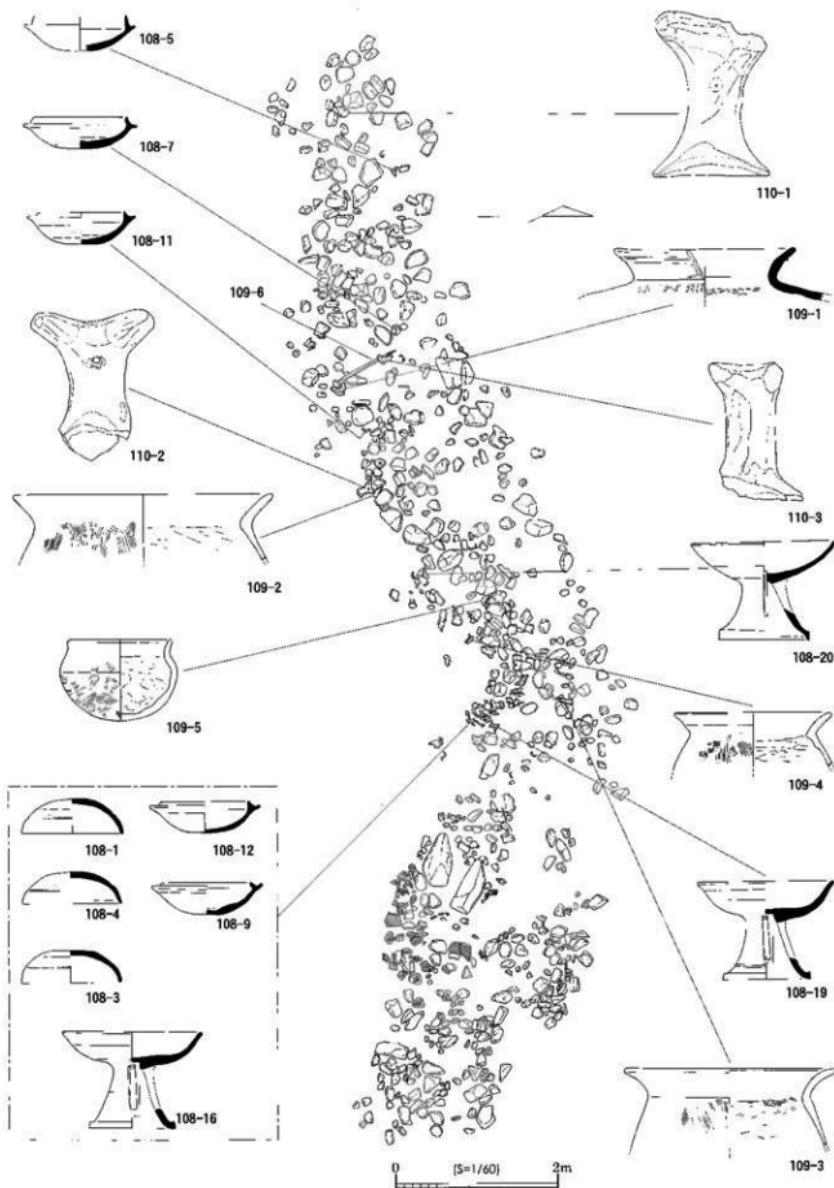
6は切先を欠損する大刀で全長約80cm、幅3.0～3.8cm、厚さ約0.5cmを測る。全体的に錆化が著しいが、茎部に目釘穴がある。

土製品（第110図）

1～3は二つの七製支脚である。1と2には円孔が穿たれ、3は鋸が付くものである。



第106図 I区古墳時代遺構配置図、3号集石実測図



第107図 4号集石実測図

写真図版一〇〇

四号集石



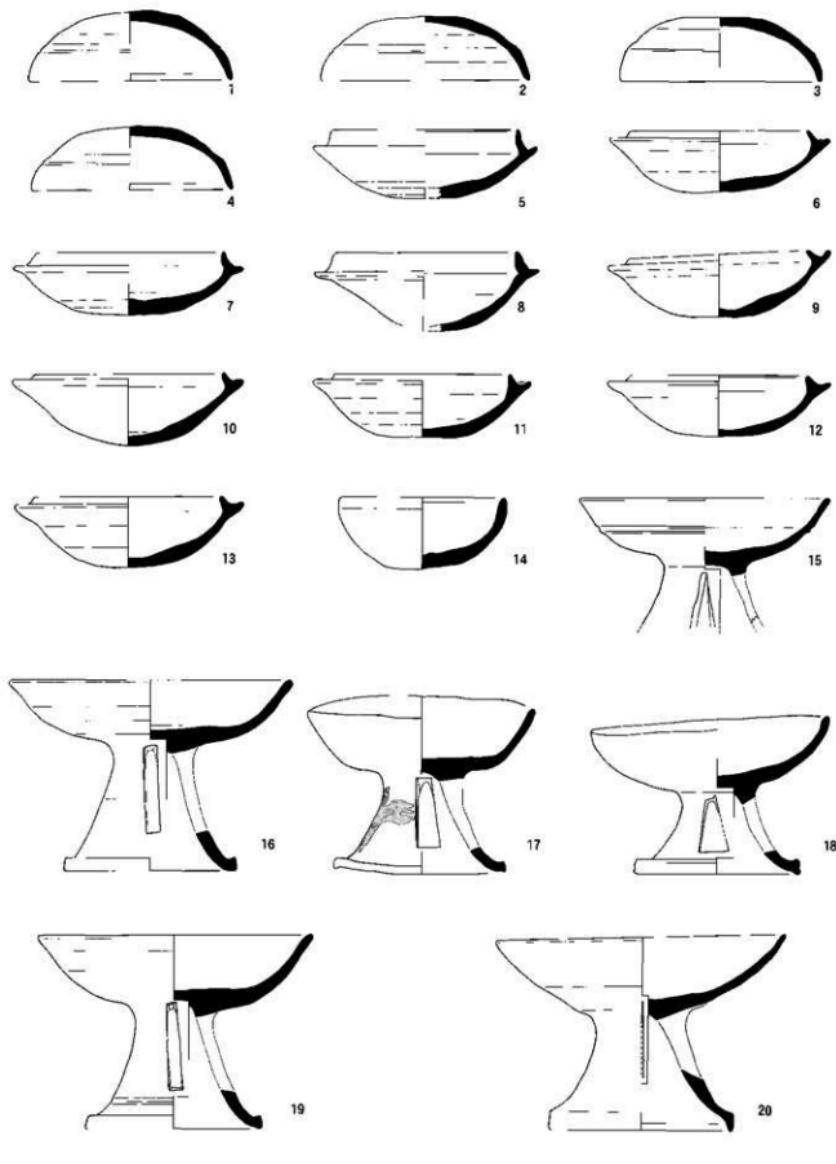
上：東から
下：大刀（109-6）

第32表 4号集石出土遺物 観察表①

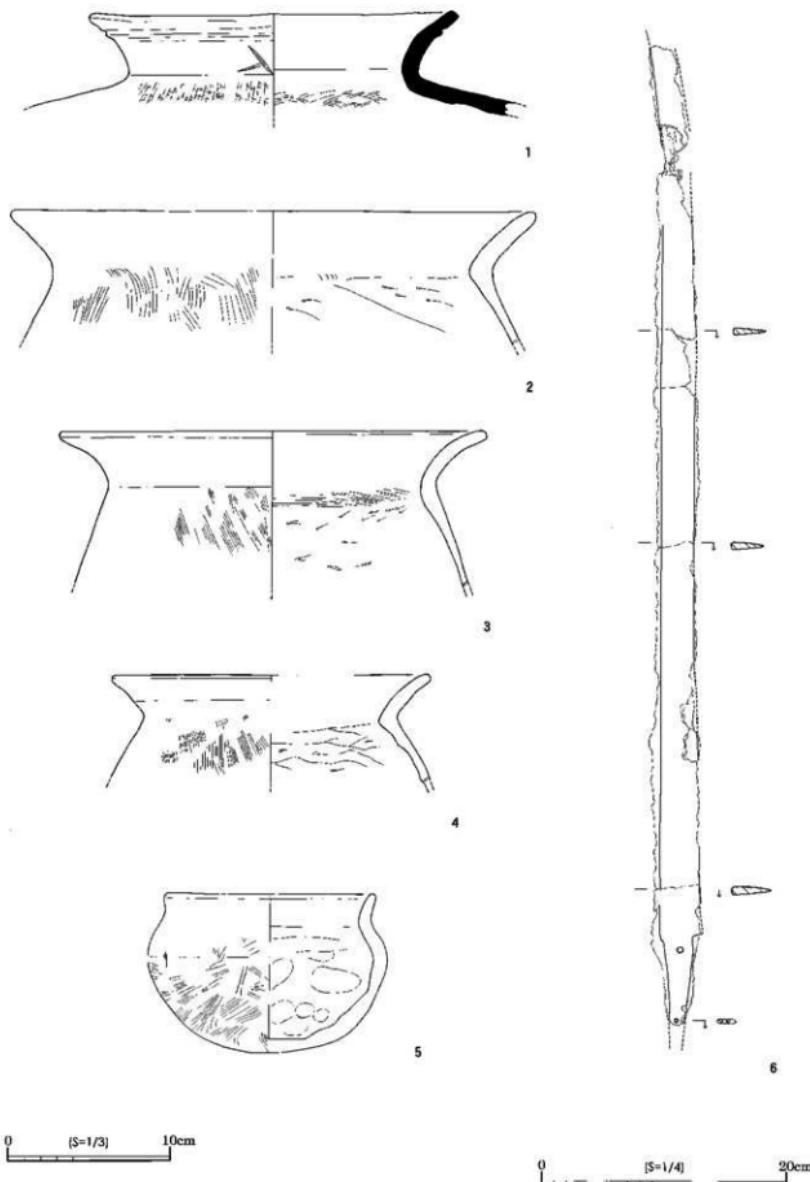
種別	器種	口径	底径	高さ	残存率	調整	色調	施文・備考
第108回								
1	須恵器	壺蓋	12.4		4.2 全体の80%	内面：口縁部山輪ナデ、中央ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ヘラ 切り後ナデ	内外面：青灰色1	肩部に1条の沈線
2	須恵器	壺蓋	12.6		3.95 全体の90%	内面：口縁部山輪ナデ、中央ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ヘラ 切り後ナデ	内外面：青灰色1	肩部に1条の沈線
3	須恵器	壺蓋	12.2		4.0 全体の70%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ヘラ 切り後ナデ	内外面：青灰色1	肩部に1条の沈線。外面の一部に 灰白色自然釉。
4	須恵器	壺蓋	12.0		3.9 全体の90%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、頂部ヘラ 切り後ナデ	内外面：青灰色1	肩部に1条の沈線。外面に白色 自然釉。
5	須恵器	壺身	(11.3)		4.2 全体の80%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部四輪ナデ、底部回転ヘラ ケシリ	内外面：青灰色2	
6	須恵器	壺身	10.85		3.7 全体の70%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：青灰色1	
7	須恵器	壺身	11.4		3.9 全体の80%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：青灰色1	外面に白色自然釉
8	須恵器	壺身	11.0		3.6 全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：青灰色1	外面の一部に白色自然釉
9	須恵器	壺身	13.6		3.8 全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：青灰色1	歪みあり
10	須恵器	壺身	11.4		4.4 全体の90%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデか 後ナデ	内外面：灰色2	外面白色自然釉
11	須恵器	壺身	10.7		3.9 ほぼ完形	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：灰色1	
12	須恵器	壺身	10.8		3.8 全体の80%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：灰色1	
13	須恵器	壺身	11.4		4.4 全体の80%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	内外面：青灰色1	外面の一部に白色自然釉
14	須恵器	壺身	9.3	4.8	4.45 ほぼ完形	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色4	
15	須恵器	高壺	(15.2)		全体の80%	壺部内面：体部回転ナデ、中央ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内外面：灰色1	壺部に2条の沈線。2方三角透 かし。
16	須恵器	高壺	17.0	10.6	11.8 全体の80%	壺部内面：体部回転ナデ、見込ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内面：灰色1/外面：灰色2	2方方形透かし。
17	須恵器	高壺	13.7	10.4	11.0 全体の70%	壺部内面：体部回転ナデ、中央ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内外面：灰褐色4	2方方形透かし。脚部の一部に 漆付有。
18	須恵器	高壺	14.4	(9.8)	9.6 全体の70%	壺部内面：体部回転ナデ、中央ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内外面：青灰色2	2方三角透かし。
19	須恵器	高壺	(16.6)	11.2	12.0 全体の60%	壺部内面：体部回転ナデ、見込ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内面：灰色1/外面：灰色2	2方方形透かし
20	須恵器	高壺	17.6	11.0	11.9 全体の60%	壺部内面：体部回転ナデ、見込ナ デ/壺部外面：回転ナデ/脚部内外 面：回転ナデ	内外面：灰色1	1方に切れ目

第33表 4号集石出土遺物 観察表②

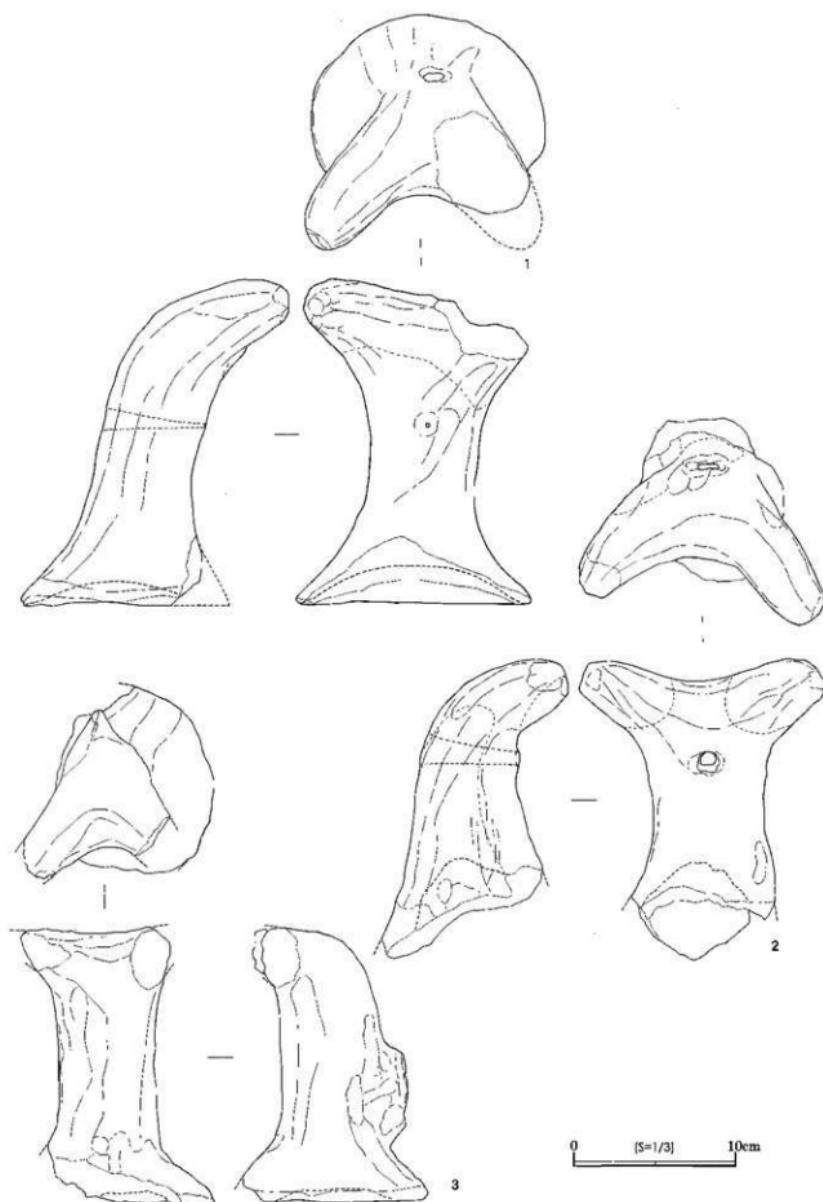
番号	種別	器種	口径	底径	器高	残存率	調 整	色 調	施文・備考
第109回									
1	須恵器	壺 (21.8)	口 緩 ~ 底 部 全 周 の40%	内面：口縁部回転ナデ、肩部同心 円状当て眞皮/外面：口縁部回転ナ デ、肩部捺丁タタキ日	内外面：青灰色1	口縁に1条の沈線、頸部にヘラ 記号			
2	土師器	壺 (32.0)	口 緩 ~ 底 部 全 周 の20%	内面：口縁部回転ナデ、肩部ヘラ ケズリ/外面：口縁部回転ナデ、肩 部ハケメ	内面：灰褐色2/外面： 灰褐色3	外面部の一部に煤付着。外側 肩等に黒斑。			
3	土師器	壺 (25.7)	口 緩 ~ 底 部 全 周 の25%	内面：口縁部回転ナデ、頸部ハケ メ、肩部ヘラケズリ/外面：口縁部 回転ナデ、肩部ハケメ	内外面：棕褐色1				
4	土師器	壺 (19.2)	口 緩 ~ 底 部 全 周 の20%	内面：口縁部回転ナデ、肩部ヘラ ケズリ/外面：口縁部回転ナデ、肩 部ハケメ	内面：灰褐色2/外面： 橙褐色1				
5	土師器	壺 12.3	9.9 全体の80%	内面：口縁部ナデ、肩部以下ナデ 及び割離圧痕/外面：口縁部ナデ、 肩部以下トハケメ	内外面：灰褐色2	外面部の一部及び外側底部に褐斑。 外側底部に二次焼成痕あり			
6	鉄製品	大刀			本文参照				
第110回									
1	土製品	上製 支脚	20.2	全体の70%	全面：ケズリ後ナデ	全面：	2方向突起、側部に貫通孔		
2	土製品	上製 支脚		全体の80%	全面：ケズリ後ナデ	全面：	2方向突起、側部に貫通孔。突 起部の一方に黒斑。突起部二次 焼成		
3	土製品	下製 支脚		17.0	全体の60% 全面：ケズリ後ナデ	全面：	3方向突起、背面の突起はヒレ 状		



第108図 4号集石出土遺物実測図①



第109図 4号集石出土遺物実測図②



第110図 4号集石出土遺物実測図③

写真図版一〇一

四号集石出土遺物



108-1



7



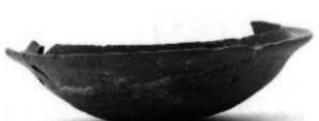
2



8



3



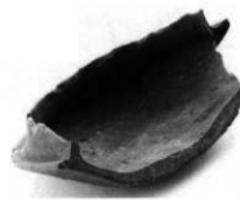
9



4



10



5



11



6



12

写真図版一〇二

四号集石出土遺物



108-13



18



14



19



15



20



16



109-1



17



2

写真図版一〇三

四号集石出土遺物



109-3



110-3



4



2



5



1



6

第2節 包含層出土の遺物

本章は古墳時代の遺構・遺物を扱うものであるが、古墳時代前期のいわゆる山式土師器については、第5章第1節の弥生土器の項で掲載している。弥生時代の遺物と近い層位で出土し、土器自身も連続するものであるからである。また古墳時代後期の須恵器蓋坏・高坏などは第15章第1節の奈良・平安時代の須恵器のところであわせて掲載した。したがって、本節で扱うのは古墳時代中期を中心とする時期のものに限定されている。

一括性のあるグループ

古墳時代中期の土器はごく限られた地点からまとまって出土した。(一部は古代の包含層など新しい時期の堆積層に混入したものがある。それらについては個別に言及している。) 明確な一括性があるものは高坏K06・08と壺K23である。これら3点はIV区の古代の建物構築面直下からかためられた状態で出土した。残存状態が完形に近い良好なものであったことから、土坑などの遺構内におさめられたものである可能性が高い。ただし、掘り込みなどは確認できなかった。

次に土器群としてのまとまりをもつものはI区の中央北側、E14グリッドから出土したものである。これらは古代の遺構面直下で、碟に混じて出土している。遺構としての範囲は確認していないが、出土地点が狭い範囲にまとまっていることから、ひとつの遺構に伴って一括される可能性が高い。ゆるやかな傾斜をもつ溝などの埋土巾か、集石を伴う土器だまりが想定されよう。こうした一群は以下のとおり。土師器高坏K01・02・03・04、壺類K09・10・11、須恵器把手付壺K16、土師器壺K19・20、以上10点。

土師器高坏

K01~08は土師器高坏。うちK01~04は赤彩されている。K01は壺部内外面と脚部外面に放射状の暗文を施したもので、脚部は図示したより上位まで暗文があったようであるが、接合部にかけては摩耗が激しく残っていない。壺部の暗文は、明瞭につまみ出された稜線を境に、上部(側面)だけに施される。壺部内面の見込み部分は使用による摩耗が著しく、赤色の塗彩は完全に消えている。胎土に含まれる砂粒が露出するほど使い込まれており、何かを突き潰したりする作業に用いられたようで、刺突による細かい凹みがみられる。脚部内面は赤彩されないが、外面を塗彩した際の垂れや飛沫が付着している。円形透かしが三方に設けられ、配置は均等間隔になされている。表面の調整が念入りで、成形は歪みが無く、暗文の間隔が狭く細かい点など全体に作りが丁寧な印象を受ける。煤らしき黒斑が部分的にあり、火を受けたことが推定される。K02は壺部内面のみに放射状暗文が施される。見込みを含め、表面は摩耗ほとんど無く新鮮な表面が残されている。壺部下面には脚部との接合時と思われる指押さえの圧痕があり、凹凸が激しい。三方に開けられた脚部の円形透かしは間隔が不均等で、脚部内面にはケズリの段が残るなど複雑な部分がある。K03は残存状態が悪く断定できないが、残っていた壺部の底面20%程度を見る限り、内面に暗文は施されていない。若干、見込み部分に塗彩のはがれが認められ、一定の使用が考えられる。脚部外面には縦方向のケズリ単位の稜線がナデ消されずに残る。三方円形透かしの間隔は均等。K04は器壁が厚ぼったく難なつくりのもの。暗文は壺部内面に、幅の太いミガキ原体によって施される。優美な曲線ではなく中心から直線が放射状に広がるもので、側面への立ち上がりを境に屈曲させている。壺部下面には接合時の指押さえによる激しい凹凸がそのまま残され、赤彩も塗彩のハケ単位を残すなど粗く薄いものである。全体に焼成が甘く、脚部内面は黒斑を大きく残す。

K05~08は赤色塗彩されない土師器高坏。K05は壺部が深く大きいもので、器壁が厚ぼったい。壺部成形時に、下半に放射状にハケメを施している。胎土がきめ細かく、色調が白っぽい特徴から古墳前期のものに似るが、器形(壺下部に稜線を設ける点)などから時期が下るものと判断される。古代の包含層(IV区50層)から出土した。K06はK08・壺K23とともにかたまたった状態で出土した。掘り込みなどは確認できなかったが、この3点は土坑などに納められたものか、かため置かれた状態で埋没したものと考えられ、一括性が高い。K06は表面調整のためのケズリ痕をそのまま残す点に特徴がある。壺部内面だけはナデで仕上げられるが、外面・脚部には勢いの

あるケズリ痕がそのまま残されている。坏部下半から脚部にかけては乾燥が進んだ段階のケズリのためミガキに近い粒のおさまりがある、表面がなめらかになっているが、坏部上半には坏部成形時のケズリのまま残り、砂粒の大きな動きが観察される。坏部内面の見込み部には突かれたような器壁表面のはがれや凹みがまとまって認められる。坏部内面にはうっすらと赤みをもつ部分があり、薄く赤彩されていたものが使用によって消えた可能性がある。坏部外面上には赤彩された痕跡はまったくうかがえない。K07は大きく広がる坏部破片。坏部下面には接合時の指押さえの凹凸を残す。全体に焼成時の黒斑が大きく残る。K08はK6・K23と一緒に出土したもの。暗文を真似たヘラがきが特徴。坏部内面の見込み部と、坏部外面上半には細いヘラ状工具で放射状に刻みが加えられている。明らかに暗文を意識したものだが、最終的にはナデなどの調整によって消されているものが多く外観上の効果はほとんど無い。坏部内面見込みにはK06同様に刺突されたような細かな凹みを多く残す。K06より凹みの範囲は広く、立ち上がりにかけて密に加えられている。坏部の稜はなだらかで不明瞭、表面の調整は誰である。

土師器壺・坏

K09~14は土師器の壺・坏。K09は短頸の壺で、底部内面には指頭圧痕が大きく残る。器壁厚く調整も難。焼成時黒斑が外面下部にある。K10はL字が開く丸底の壺で、L字縁はケズリにより二重口縁を模したような形状をとる。外面はハケメとナデで比較的丁寧に調整されているが、内面は成形時の粗い状態のままで、ほとんどケズリを加えないために肩部以下の器壁は極端に厚くぼってりしている。底部を丸く仕上げる際の指押さえの凹凸が内外面に残される。被熱したような赤斑が底部近くに認められる。K11は無頸の壺あるいはワイングラス形の高坏の坏部。器壁は厚く、外面にハケメ調整を施すが凹凸を消しきれておらず、ナデも不規則に部分的に加えられるためハケメがランダムに残っている。内面の仕上げも雑なナデのみ。下端の破損部はわずかに外反しており、脚部との接合部の可能性がある。K12は橢・鉢形のものであるが、下端を欠失しているため高坏の坏部にあたる可能性を残す。外面ともうっすらと赤彩された痕跡を残す。内面は使用による摩耗が認められる。口縁端部に油焼状の焦げた箇所があり、断定するのは難しいが灯明用具として使われた可能性があり注目される。K13は全面を赤彩した坏。赤彩は厚く施されているが、特に外面ははがれが顕著で胎上表面が露出している。内面は丁寧になんで仕上げられるが、外面はケズリのままで粗く稜を残す。底部は一方方向のケズリが平行に並ぶ。K14は土師質であるが小型化した須恵器蓋坏の蓋ないし身の形状・成形方法をとるもので、7世紀前半頃のものと考えられる。本来は第15章の古代の遺物で扱うべきものであった。蓋として以下記述する。頂部から肩部にかけて5周ほど回転ヘラケズリが施される。肩部にはやや不明瞭だが幅のある浅い沈線が1条はいる。内面は回転ナデで丁寧に仕上げられ、頂部はナデ始めの強い押さえによりへこみが生じている。器形や成形・胎土は須恵器のものと全く変わることろがない。

陶質土器・須恵器

K15は陶質土器の破片で、壺形土器など的一部である。胎土は極めて細かい粒子を基調として砂粒をまばらに含んでいる。焼成は良好に堅く焼き締まっているが、断面を観察するとサンドイッチ状に芯が焼きが甘い部分がある。外面は網附文のタタキの後に、横方向にヘラ状工具で16~23mm間隔に沈線を引く。内面は横方向に丁寧にナデを施している。朝鮮半島からの舶載輸入品と考えられる。同様のものが他に含まれていないか注意して整理したが、確認できたのはこれ1点であった。

K16は把手付坏で、コーヒーカップ形の器形をなす。色調はセピアがかったり紫がかたりすることなく、薄く青みがかかった暗いもの。ガラス化した自然釉をかぶっている。K17は坏の破片で、内面には緑色の自然釉を全面にかぶっている。ごく一部の破片であるため、把手や脚の有無については言及できない。

土師器壺・壺

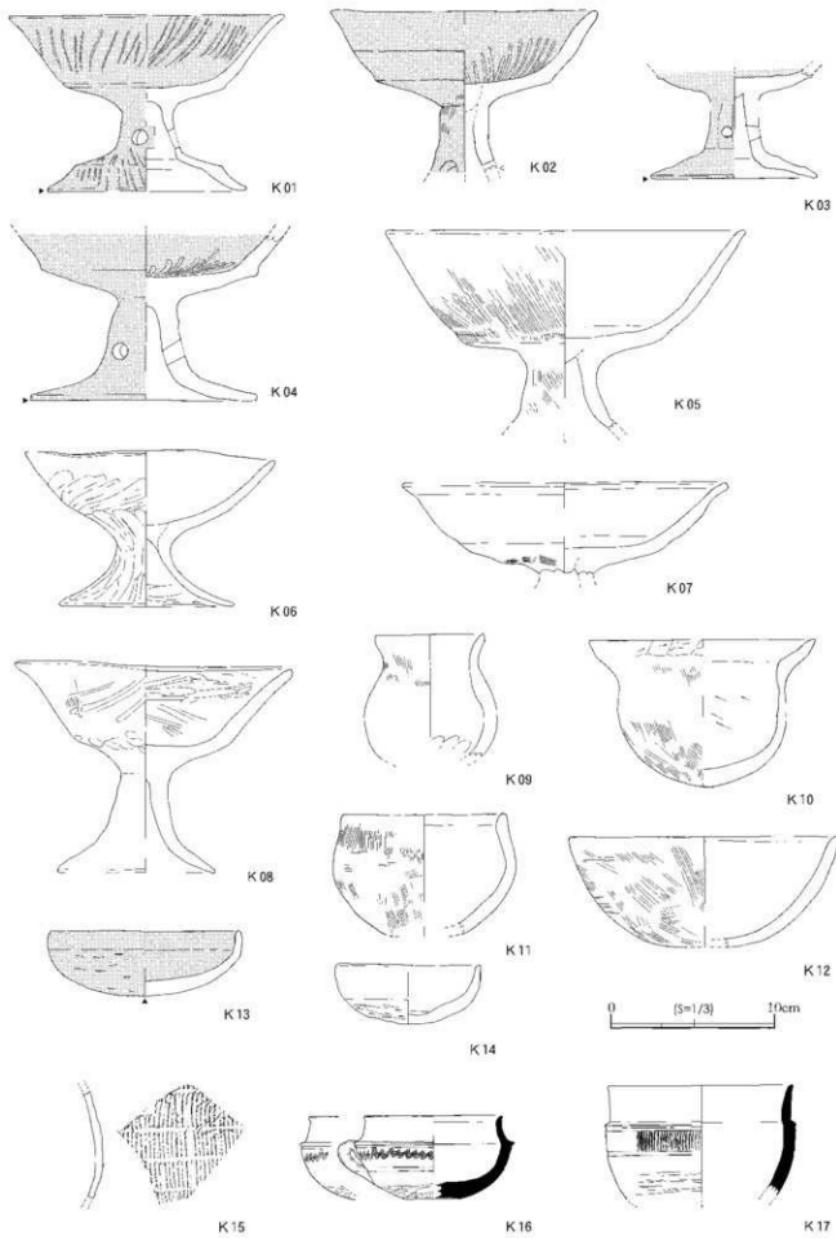
第112図に掲載した。K18は赤彩された直口壺。L字縁内部には放射状に、外部には網目状に暗文を施す。口縁内部の暗文は手の姿勢がうまくとれなかったためか整った線が切れず、途中で曲がったり隣の線と交差したり、

間隔が不揃いになつたりしている。上部に別の斜線を並べて網目状に交差させようとしているが、半周ほど施して止まっている。

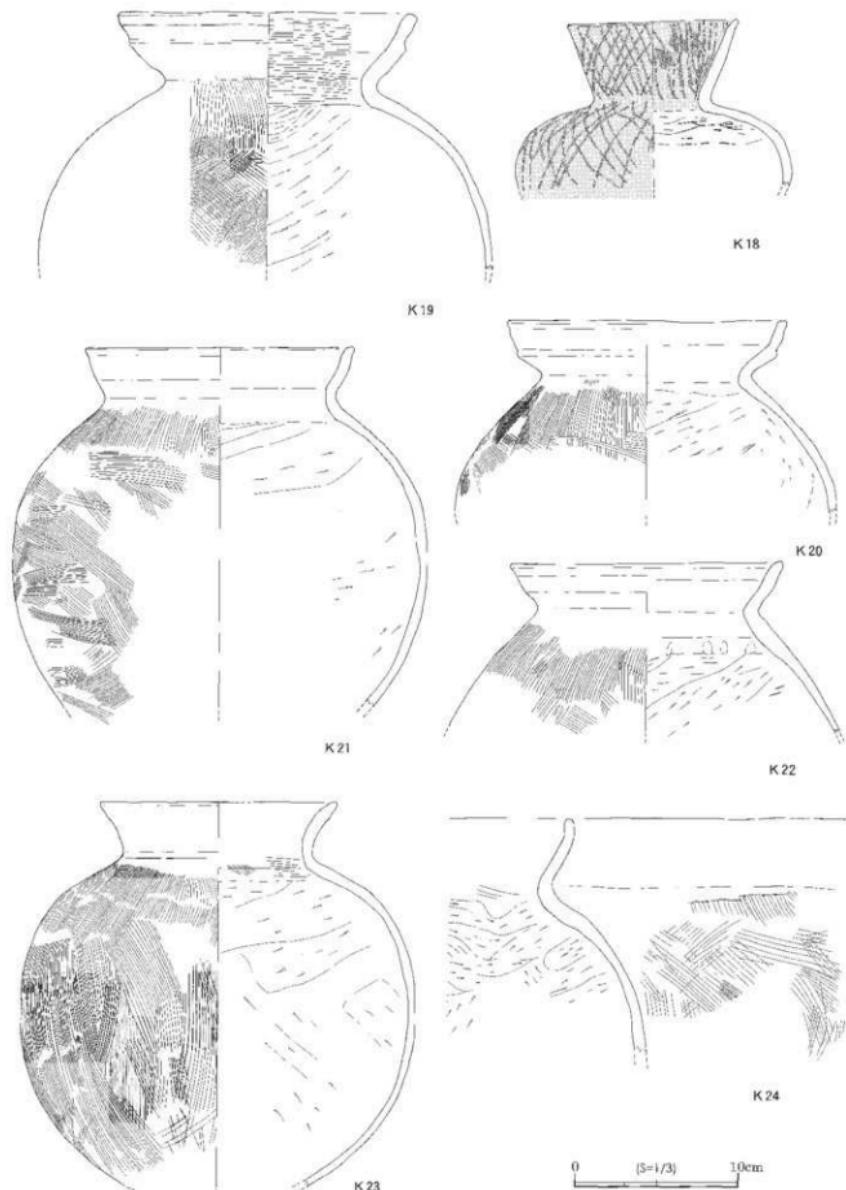
K19~24は土師器甕。K19は内面に黒色のコケ状付着物が認められる。付着は内面全体に及び、口縁部の内面が最も顯著である。K21は煮炊きでの使用痕跡が明瞭に残る。外面には煤が付着し、下半は特に濃密である。肩部には被熱により桃色化した箇所が認められる。内面の下半にはコケ状付着物が薄くみられる。K22は外面の風化・摩耗が進み、ハケメがほとんど消えている。外面には火葬状に橙色化した部分がある。肩が張らない器形や肩っぽたい口縁形状からみて他のものより新しい時期の可能性がある。K23はK06・K08と伴って出土したもの。外面にはやや間隔の広いハケメが長いストロークで施される。使用により内面底部近くにはコケ状付着物が、外面下部には煤がうっすらと認められる。胴部には2箇所、外面からの焼成後穿孔がある。K24はK21に近く、ハケメ原体の間隔が広いもので、細かい単位のハケメを重ねている。肩部以下には焼成時黒斑が、口縁下部には使用時の煤が認められる。

第34表 古墳時代包含層出土遺物 観察表

番号	器種	区	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存率	調査	色調	施文・備考
第111回											
K01	土師器 高环	I区			16.4	11.8	10.8	全体の80%	环部内外面：圆軸ナデ 脚部内外面：四板ナメ	内外面：棕褐色1 赤彩	放射状暗文。外面に 螺付者。
K02	土師器 高环	II区	E14	Y 1	(16.0)			环部40%	内面：环部・脚部回転ナ デ/外面：环部回転ナデ、 脚部四板ナメ。ハケメ	内外面：棕褐色1	赤彩 环部内面に放 射状の暗文。脚部円 形三方透かし。
K03	土師器 高环	I区	E14	Y 1	(12.0)	(6.8)		全体の45%	内面：环部ミガキ、脚部 回転ナメ/外面：环部ナデ、 脚部回転ナメ後ハガキ	内外面：灰褐色2	赤彩 脚部円形二方 透かし
K04	土師器 高环	I区	E14	Y 1		13.7		全体の50%	内面：环部回転ナメ、脚 部ナデ/外面：环部回転 ナメ/脚部回転ナメ	内外面：灰褐色1	赤彩 环部内面崩壊 环 部内面に放射状の暗文。 脚部円形一方透かし。
K05	土師器 高环	IV区	E21	5 C	21.8			全体の75%	内面：环部ナメ一部ミガキ と思われるが未明。脚部 ナデ/外面：ナデ後ハケメ	内外面：棕褐色1	
K06	土師器 高环	IV区	B19	7	15.0	10.5	9.7	全体の90%	内面：环部ナデ、脚部ナ デ/外面：环部ナデ、ケ ズリ、脚部ミガキ	内外面：棕褐色1	
K07	土師器 高环	II区	G13	1 2	(19.0)			口径全周 の25%	内面：ナデ/外面：ナデ、 ハケメ	内面：灰褐色4 外面：灰褐色2	内外面 部に黒斑
K08	土師器 高环	IV区	B19	7	16.7	9.4	13.1	全体の90%	内面：环部ミガキ、脚部 指ナメ/外面：环部回転 ナメ後ミガキ。脚部ナデ	内外面：棕褐色3	
K09	土師器 壺	I区			(6.5)			全体の30%	内面：ナデ、脚部圧痕 外面：ナデ、ハケメ	内外面：棕褐色1	
K10	土師器 壺	I区			(13.0)		9.1	全体の50%	内面：ナデ、ケズリ/外 面：ナデ、ハケメ	内外面：棕褐色3	
K11	土師器 高环	I区			(9.6)			环部の30%	内面：ナデ/外面：ナデ、 ハケメ	内面：棕褐色1 外面：棕褐色2	
K12	土師器 壺	I区			16.0		6.8	全体の50%	内面：横ナメ/外面：ハ ケメ、ナデ	内外面：棕褐色3	
K13	土師器 壺	I区	D16	Y 2	11.5		4.1	全体の90%	内面：体部回転ナメ、中央 体部外縁1周脚部ナメ。内 外面：棕褐色1 赤影		
K14	土師器 壺	II区	G13	1	8.6	8.9	3.7	全体の80%	内面：体部回転ナメ、底部1周 脚部ハケズリ	内外面：棕褐色2	
K15	陶質上器	II区	K満				小片		内面：ナデ	内面：灰褐色3 外面：灰褐色4	擦研厚体押付による 水平に押付け沈模。
K16	須恵器 把手付 环	I区	E14	Y 1	(8.3)	(3.2)	5.15	全体の30%	内面：回転ナメ/外面： 体部回転ナメ、下部へラ ケズリ	内面：灰褐色4	一部灰色自然釉。3 条の波状。
K17	須恵器 环	II区	E15	Y 2	(11.0)	(11.5)		全体の15%	内面：回転ナメ/外面： 体部回転ナメ、脚部一 条沈模間に連續彫刻施 工。下部回転ヘラケズリ	内面：绿色自然釉 外面：灰色2~黑色 灰土：灰褐色5	
第112回											
K18	土師器 壺	I区	E13	3 4	10.4			口径全周 の90%	内面：口径部ミケ後回 転ナメ、脚部ケズリ/外 面：回転ナメ	内外面：棕褐色1	赤彩 内外面 方向に 暗文、外周格子状に 暗文。
K19	土師器 壺	I区	E14	Y 1	17.4			口径全周 の40%	内面：口径部ナデハケメ、 脚部ミガキ/外面：口 縁ナメ、脚部ハケメ	内外面：棕褐色1	口縁内面、脚部外面 の一部に黒斑。
K20	土師器 壺	II区	E14		06.8			口径全周 の55%	内面：口径部ナメ、脚部 ケズリ/外面：口径ナメ、 脚部ハケメ	内外面：灰褐色2	外周口縁脚部の一部 に黒斑。
K21	土師器 壺	I区	G14	1 2	(16.3)			脚部全周 の25%	内面：口径部ナメ、脚部 ケズリ/外面：口径ナメ、 脚部ハケメ	内外面：灰褐色3	外周脚部下半に螺付 者
K22	土師器 壺	I区	G15	1 1	16.6			口径全周 の90%	内面：口径部ナメ、脚部1周 指壓痕、脚部ケズリ/外 面：口径ナメ、脚部ハケメ	内外面：棕褐色1	
K23	土師器 壺	IV区	B19	7	(14.4)			脚部全周 の25%	内面：口径部ナメ、脚部 ケズリ/外面：口径ナメ、 脚部ハケメ	内外面：灰褐色2	外周体部一部に螺付 者
K24	土師器 壺	I区	G14	1 2				口径一部 の10%	内面：口径部ナメ、脚部ケ ズリ/外面：口径ナメ、脚部ハ ケメ	内外面：灰褐色2	外面に黒斑



第111図 古墳時代包含層出土遺物実測図①



第112図 古墳時代包含層出土遺物実測図②

写真図版一〇四 古墳時代包含層出土遺物



K01



K05



K02



K06



K03



K07



K04



K08

写真図版一〇五

古墳時代包含層出土遺物



K 09



K 15



K 10



K 16



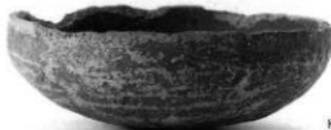
K 11



K 17



K 12



K 13



K 14

写真図版二〇六 古墳時代包含層出土遺物



K18



K20



K19



K21



K22



K23



K24

